

---

# しろくろっ！

大江戸 瀬都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しろくろっ！

### 【Nコード】

N6977K

### 【作者名】

大江戸 瀬都

### 【あらすじ】

世界のあらゆるものをあらゆる手で盗んでいく国際的組織「バズイスタ」。それに対抗すべく作られた組織「フェリチターレ」。そして彼らが拠点とする東京のとあるオフィス街にいる様々な”変わり者”たち。

彼らを巻き込みロンドンと東京でおこる複数の「争奪戦」。

そしてそれぞれの「争奪戦」の結末とは……？

さあ妻でよう。これから始まるsettettoのために

\*  
”なあ？”

この世界には、「良い人」と「悪い人」がいるだろうか？  
ふと。親父に言われたことを思い出した。

”うん。ヒーローはいい人で、泥棒は悪い人なんだ！”  
純粹に目を輝かせて話す俺がいる。

”ああ。そうだ。だがな、父さんは最近思っただ。ヒーローでも何らかの形で何かを盗ったり、泥棒さんでも誰かを何らかの形で助けたり。あるだろうか？”  
疑問を浮かべた表情の親父は今でも忘れられない。

その時、その質問に俺は何て答えたのだろうか？  
全く覚えてなかった。もしかしたら言葉に詰まって答えることができなかったのかもしれない。  
しかし、この後にまた親父がいった言葉だけは、先ほどよりも鮮明に覚えていた。

”時々思っただ。この世の良い人と悪い人ってなんなんだろうな。って、わからなくなるよ。あんな奴ら追っかけてたら。本当に。なんなんだろう良い悪いって。”

その言葉を聞いて俺は頭にたくさん疑問がわいた。考えて考えた考えて……結局その質問に答えなかった。その……気づいた時には親父は隣にはいなくて。散歩しに行ったらしい。そうか父さんも俺と同じで一人で考えたかったんだろうな。と今になって知る。

今は？あの質問大人になった俺はいま、もうとっくの昔に死んだ親父のあの質問に答えることができるのだろうか。だめだ。やっぱりわからない。

やっぱり難しいよ。無理だつて。答え見つけたのか？あんたは。俺には無理そうだが・・・気にならないと言ったら嘘になるな。

パチっ・・・

変な夢見るから起きちまった・・・

ねむい。だるい。

そう思ったけれど、なんか寝れないので男はキッチンに向かう。

しかしさみいな。

コーヒーでも飲むか？いやコーヒー飲んだら眠れなくなるな。やめよう。となると・・・緑茶？いや。あんなに苦いの俺嫌いなんだよな・・・ホットミルクは・・・基本牛乳嫌いだ。となると・・・ポツカレモン？そうだな。そうしよう。

暗闇の中。男はポツカレモンの粉末が入った袋と棚からスプーンを取り出して、お湯を沸かし始めた。

しかしまあ・・・

変な夢を見たもんだ。あの話をしたときは・・・俺がまだロンドンにいた6歳ぐらいのころだった。かなり昔だな。ていうか。なんでこのタイミングで思い出した自分。なんかあったっけ？それに関して？まあいいや。きっと疲れてるのかもな。疲れすぎて、もう忘れかけてたあのことが夢に出てくるんだ。きっとそうだ。昨日も遅くまで仕事してたし。

ふと、リビングの時計に目を移す。

・・・ああ。3時か？

3時といっても暗いので午前3時だろうな。

仕事から帰宅したのは12時ぐらいか？少し遅かったな。でもまあ

今日は仕事も休みなのでゆっくり寝ることができる。幸せだ。最近ホントに忙しかった。

昨日はめんどくさかったな。なんか変な奴らに絡まれた。まあ、連れの奴が暴れてくれたおかげで無事だがな、いやいやいや。ホント裏社会は怖いね。と言ったときながら、自分も結構裏社会の人だったりする。

……そろそろ沸くだろうか？お湯、

そう思ってやかんの火を止めようとコンロに近づく。そのとき。

PLLLLLLLLL!!

自分の携帯が鳴った。

妙に大きくて起きたばかりの俺の耳に着信音はガンガン耳に響く。

「ああ……もうウゼエ。」

そついいながらも、よろよろと携帯を取りにリビングに向かう。

「はい。もしもし……？」

携帯電話を手に取った。電話からは聞きなれた上司の声が聞こえてきた。

《もしもし？バーニー？夜遅くごめんね》

ケラケラと笑う声がしたので相手は絶対夜中3時に電話してきたことを悪く思っではないだろう。

「なんだ？イタ電なら切るぞ。」

バーニーと呼ばれた男はイライラしながら相手に返す。

《違う違う！イタ電じゃないよ！仕事だよ仕事。すぐオフィス来て》

「え……？いやだ。」

《上司がそう言っただから！すぐ来てね！》

それだけ言い残して電話は切られた。

・・・ホント、うちの組織って労働基準法無視だよな。いや組織だから労働基準法関係ないのか？

まあいいや。

そう思つて、急いで支度をすることにした。

\*

昔・・・といつても、100年くらい前のことだが。

ある2人の男がいたそうなの。

1人は物を盗む盗人。そしてもう1人はそれを追いかける今でいう警官だ。

盗人は物を取るのがうまかったし、趣味だった（何ともまあ悪趣味だ）。だから金目のものを盗んでいきやがった。盗人は鼠小僧に憧れていたの、いつも富んでいる家から物を盗む。盗むものが高価なものほど彼の心は満たされる。

一方、警官のほうは最初、仕事で奴を追いかけていた。しかしだんだんと盗人を追いかけているのに夢中になった。いつしか彼は警官をやめ個人で盗人を追いかけるようになった。追いかけても追いかけても奴は捕まらない。それに少し苛立ちながらも彼は奴を追いかけるのが楽しくなった。楽しくて楽しくて仕方なかった。

年を重ねていくにつれ2人のまわりには人が集まるようになった。同志やその2人の人望にひかれたというやつ、さまざまに奴が2人の”仲間”として集まった、

そしてその”仲間”はどんどん大きくなり今の「バズイスタ」と「フェリチターレ」に至る。

と俺は先代の先代から聞いた覚えがある。いや、もしかしたらほか

の奴から聞いたけど勝手に自分が先代の先代から聞いてると勘違いしているのかもしれない。まあ、どっちにしようが今後の俺の人生に支障を利かすことはないのでもいいのだが。

一ノ瀬 紺は遅くまで自分のオフィスに残ってそんなことを考えていた。

一応仕事でオフィスに残ったのだが、ほとんど寝ていた。今さっき起きたかな？ぐらいだ。

なんか、部屋がむんむんすると思ったので窓を開けることにした。

窓を開けると、ふわりと涼しい風と共に東京の都心名物高層ビル群の明るい光が目に入る。

都会ならではの夜景だと思った。

今は夏なんだが、風が涼しい。そうか。そろそろ秋なんだ。

その涼しい風に当たりながら少し変な感じがした。

これから何か……何か始まるんじゃないか？

いやな予感だ。

涼しい風は紺にいやな予感を感じさせた。

少し不安になる。

そしてその不安がだんだんわくわくへとかわる。

これから何が起こるのか気になるということもあるが、少しだけあの「バズイスタ」を捕まえるチャンスに近づくから。

何が始まるのだろう。

今から。

少しだけ紺は都会の夜景を見ることにした。

\*  
こんにちは。「バズイスタ」のボスをやっている一ノ瀬 麻です。  
麻って変な名前でしょ？ホントはこれで「そう」って読まそうと考  
えてたらしいんだけど、さすがに無理がありすぎるから、そのまま  
「あさ」って呼んでね。

なんでいきなり出てきたかって？  
それはあれだよ。あまりにも前者の二人が物語の始めかたがへタす  
ぎて、見てられなくて出てきました。

ついさつき、お客さんから依頼が来てね。

何でも、中国のなんとかっていう素晴らしい宝石がほしいので、ロ  
ンドンに行って盗ってきてくれないかっていう内容でさ。ぶっちゃ  
け、宝石とかそんなものに興味はないんだな。先代の先代の先代が  
そうだったらしいけど、僕はそれよりもマツクのポテトのほうが好  
きだなあ。僕が興味あるっついで、兄さんの部下とか、戦うメロン  
パン売りとか、大道芸人の情報屋さんとか、便利屋さんとかかな  
？あとは、探偵。

そういえば、兄さんは気づいたかな？ ロンドンでこれから起こること。無駄に勘がいいからね。あの人。僕が知ってる中で一番厄介な人だよ。やっぱりさ、兄さんは東京に残って地味に仕事するかな？ ロンドンに行くなら僕も行つて前々回の借りを返したいんだけど・・・東京に残るなら、それもできないかな？ ちよつと残念。

気になることがあるといえば、霧真がなんかうれしそうに街中歩いてたことかな？ 気持ち悪かったな。あの性悪のことだから人の不幸みて笑つてたんだろうね。・・・いや、これから起こる他人の不幸を予測して笑つてたのかな？ どっちにしろいい話じゃないよね。・・・また巻き込まれたらどうしよう。その他人の不幸つてやつに。霧真なら平気で人巻き込んできそうだし、むしろ巻き込むこと楽しんでるし・・・ほんと気持ち悪いなあいつ。ちよつと変わった奴だよ。まあ、僕が巻き込まれたら仕返しになんかしてやろう。

フェリチターレの組員で、兄さんの部下の・・・アランとデューイって名前の2人組。1年ぐらい前に兄さんが余った人員で作ったコンビらしいけど、いや。彼らはすごいよね。1年前に見たときは息が全然あつてなくてさ。いや、でも妙なところで偶然みたいに息が合うこともあつたけど・・・。個人個人見てみればすごい特技とか持つてるのに、コンビにしてみたらお互い意地張つてさ。まあお互い若かつたしね。仕方ないよ。若い者は衝突しあつて成長するんだよ。まあ僕もまだ若いけど。最近はその意地張りあつてたのがうそみたいに仲良くなつてるらしいね？ 成長したよね。ホント。しかも、仲良くなったおかげでさらに息が合うようになって今は恐ろしくも素晴らしいコンビになつてるんだつてね。

でも、うちだつてそのコンビに負けないような2人組はいるよ？ 彼らは・・・フェリチターレのコンビみたく仲がいいわけじゃない

よ。むしろ仲が悪いかな？いやでも彼らの仲の悪さは笑える程度だから安心して。1人は人間離れた強さでね。運動神経がよすぎるの。もつとも僕は兄みたく運動神経に恵まれなかったから、そんなにシユバシユバ動くのは得意じゃないんだ。その代り頭じゃ負けなようにしてる。そしてもう1人は僕みたいに頭脳派でね。作戦とか、立てるのうまいんだよ。あとは交渉とかね。自分の思い通りに人を動かしていくからすごいよね。初めは武術派の彼が頭は弱いつてんで、適当に頭脳派の彼をまわして結成させたコンビなんだけどこい、なんで早く気付かなかったんだろうね。組織の中でもトップクラスの武闘派と頭脳派を組み合したら最強のコンビになるって。まあ、結果的にコンビはできたんだしいいか。

街にいる戦うメロンパン売りと性悪探偵、大道芸人兼情報屋と便利屋についてはご存知かな？僕も彼らとは同い年なんだけどね。兄さんは確か彼らとは同級生で結構仲良かったって聞いたことがあるな。もつとも、霧真からの情報だから半分は疑っているが。でも、大道芸人兼情報屋と便利屋さんは高校時代、仲が良かったのは確からしい。ぶつちやけ今も仲がいいけど。彼らは不思議なことに、自分の職業を相手には話してないんだよね。内緒にしているみたい。別に隠すことなんてないと思うけど、彼らは必死に隠しあつてんだ。だから便利屋は情報屋が情報屋をやっていることを知らなくて、情報屋は便利屋が便利屋をやっていることを知らないんだよね。ややこしいね。おかしい話だけど、とてもいじりがいのある話じゃない？つて霧真は思っているだろう。ごめん実は僕も今そう思っていた。いや面白いよ普通に。霧真は霧真で、お互いの正体を間接的にばらしてあげようと策を練ってるらしいけど、情報屋と便利屋を敵に回すなんて面倒くさいよ。霧真は真正正銘、性悪だと思う。人の不幸が大好物つていやだね。戦うメロンパン売りは間接的に互いの正体がばれる阻止したいみたいだよ。彼優しいからね。優しいんだけど、敵に回したくはないかな。彼、とってもおっかない人だし。自分の

カンに障るとすぐに暴れちゃうからさ。いや。まじで。怒らせちゃいけないよ。

そろそろ話したかな。キャラのことか。

僕のキャラは……まあ、おしゃべりな頭脳派紳士って覚えててくれれば……

兄さんや戦うメロンパン売りみたいに暴れん坊じゃないしね。

そろそろ……

来るかな？バーニー。夜中3時とはいえホントご苦労様だよね。じゃあ僕はこれで。

少し、面倒なことに巻き込まれてくるよ。

愉快な4人のduetto - 前章 -

\*

東京 某ビル街 所長室にて

「また盗られたあ〜?」

電話で会話しながら一ノ瀬 紺はしかめ面を見せた。

《そうなんだよ。紺》

相手はあたふたしている。

「大体おたくのセキュリティってのはどうなってるのか知りたいね。高価な宝石ばっか置いてるくせに甘っちょろいセキュリティばかりですよ…前助けたときに言ったろ!?セキュリティ強化しろって!」

《うちのオーナーケチなんだよ!》

「あーあーオーナーの愚痴は後で聞く!大体本部に連絡して来るなよ!おたくのところはロンドン支部だ!ロンドン支部に電話しろ!」

《ロンドン支部が取らないんだよ》

「…あの女…居留守か…」

《とにかく頼むよ》

「わかった！わかったから！」

《お願いだよ！》

ガチャン

電話の相手はロンドンの有名な宝石店の店員だった。

宝石がいくつも盗られたと通報してきたのである。

「ふー…勘弁してくれって。今日はみんな出張で本部はガラガラなんだよ。」

一ノ瀬は困ったように呟いた。

ここは国際的犯罪防止組織『フェリチターレ』の本部。まあ本部つつても外国にあるんじゃないやなくて東京にあるんだけどさ。

フェリチターレは外国にいくつもの支部を持っている。犯罪防止をするためには世界中に支部を持たないと手が回らないし…

「はー・・・全く麻の野郎・・・こっちが手え回らないの知っててやってるな。」

麻とは俺の弟だ。

俺の弟は自分と全く別の組織を仕切っていた。

国際的窃盗組織

『バズイスタ』

正反対の組織だ。こちらは世界中飛び回って盗みを働いている。今のフェリチターレの敵はほとんどこいつらだといっている。

大体、先週北京で捕まえてきたばっかだぞっ！？  
それをあの野郎。

こっちの人手不足をわかってるかのように、ロンドンでさわぎを・・・

いや・・・まだロンドンの宝石店でおきた窃盗事件がバズイスタ  
だとは・・・

・・・いや。80%そうだと思うけど・・・

まあいい。

その前に、誰をロンドンに送るかだ。

最近ロンドン支部手え抜きすぎなんだよ。

あっちが電話とらないなら、こっちが動かないと。

面倒くせえ……………

頭の中はその単語で埋め尽くされた。

ホント、誰をロンドンに送ろう。

悩むな……………

そっぴや、デューイはいたっけな……んでも一人はさすがにな……

・

……………

……………

……………

またあのコンビ結成でもするか。それが一番だな。

一ノ瀬の頭の中には、二人の人物がでてきた。

以前、今とほとんど変わらない状況の中で自分が無理やり組ませたコンビ。

すれ違いの激しいコンビではあったが、何かと最強のコンビでもあった。もともとは違う部署から来たコンビだ。

決めた。

紺は素早く自分の携帯を取り出す。

アドレス帳から一人の人物の電話番号を引きだし電話をかけた。

「もしもし？アランか？」

\*

いや、東京つてのはホントすごいとこだよな。

こんなビル、イタリアにあつたつけな？多分なかつた。

イタリアにいたときは兄貴がウザかつた。いろいろと面倒くさいことがあつたし。たとえば、兄貴が暴れた後の後始末とか。なんかいるんなマフィアとか道場破りしてきたし。……けどまあ。そんな生活に対してあまり嫌気はささなかつたのだが。逆に、日本に来てから平和すぎて少し退屈なのだが……。一度……。一度だけ、日本に来て心底楽しいと思つたことがあつたが、それからはホント。何も無い。

そんなわけで、アラン・チエレスティーノは今日も暇……。を  
する予定だつた。

だが、彼の退屈な日常は一本の電話で壊される羽目となる。

「今日は何もないの？」

ちょうどアランの隣にいたデューイが聞く。

2人は国際的犯罪撲滅組織『フェリチターレ』の組員だ。  
自分は兄の影響で入つた。一応事務とかをこなしている。

「・・・・・・・・まあ・・・・・・・・ないっちゃあないけど。」

携帯を取り出し時間を確認しながらアランはそうデューイに返す。

2人は昼食を食べに外に出ていて、今本部に帰ってきたところだった。

やっぱり、『フェリチターレ』の本部っていいところにあるんだなあ・・・・・・・・

アランは昼食を食べにデューイと出るときにふと思った。

本部は東京にある。

東京のと真ん中に。

周りはサラリーマンやOLがたくさんいる。

もちろん。周りがこれなので格好は2人とも黒スーツだ。

「ないのかあ・・・・・・・・暇で嫌だなあ・・・・・・・・」

はあ。と横でデューイはため息をついた。

「何言つてんだ。お前。お前はたくさん仕事あるだろ。」

「机に突っ伏したり、パソコンに向かって仕事なんて楽しくないよっ！」

「仕事に楽しさを求めるなんてな。」

人に言えるか。心の内で自分に突っ込むアラン。

「もつと、世界中を飛び回りたい！」

ぱつと両手を大きく広げくると一回転をして見せるデューイ。

「お前この前までニューヨークだっただろ。」

「ニューヨーク飽きたんだよあ！」

「大体お前。ニューヨークに何しにいったんだよ。」

「バカンス。」

「仕事だあ！仕事しに行ったんじゃないのかよ！なんだよ！バカンス！」







耳をふさぎながら一ノ瀬が答えた。

「話しが違いすぎるぞ！俺は確か福岡って聞いた！福岡って！なんだよロンドンって！少しもかすってないし！外国！ヨーロッパ！」

「資金くらい俺が出す。それにお前の兄貴はイタリアだろ？なら大丈夫。イギリスは島だし。」

一ノ瀬が言った。

「兄貴のことと言ってない！しかも最後の方は何が大丈夫かわかんない！それに資金は出さないと絞め殺す！」

「カリカリカリカリカリ……カルシウム足りてないんじゃないの？怒り過ぎだつて。」

「怒るわあ！誰だつて怒るわ！騙されて怒らない奴なんてアホだぞ！アホ！」

「じゃあ隊長！俺この前、架空請求で騙されそうになったけど俺はアホでありますか！」

デューイは敬礼をしながら、アランに聞く。

「ああアホだ！お前は根っからのアホだ！アホだから黙つていてくれ！」

アランは言った。

「とにかくさあ。行ってくれつてえ。人がいないんだよあ」

一ノ瀬がすねた口調で言う。

「……別に行かないとは言つてないだろう。」

「おお。それでこそアランだ。」

「で？今すぐ行くのか？」

「あつたりまえよあ！」

一ノ瀬はそう答えると机の引き出しから何かを取り出した。

「これ。ロンドン支部までの地図だ。後、例の宝石店。」

机の上にポンと投げられたコピー用紙を2人はのぞいた。

「あー！ロンドン支部ってこんなところにあるの！」

「こんなところって……?」

「結構都会だよ。」

「ふーん。本部と同じで便利な場所にあるんだな。」

「ん。じゃあ行つて来いよ。」

一ノ瀬が言った。

話しはあっけなく終わり、一ノ瀬は駅の前で手を振る始末だ。

「あ……あ……ああ。」

アラランが戸惑うように言った。

「英語はデューイに任せたら大丈夫だから。」

「任せてね！」

「あ……うん。って言うか英語は俺しゃべれ……」

「そいじゃ！」

そういわれてアラランの話を何も聞かずに一ノ瀬はぐいぐいと無理やり改札口へ二人を通した。

荷物をぱぱとすばやくまとめて来たし、何しろあんな淡々と言われたので外国に行くという実感がなかった。

千葉 成田国際空港 ロビー

「やったー！外国だあ！」

「相変わらずアホだな。戸惑わないのか？」

「別にー！大体今回みたいなこと、これが初めてじゃないしね！」

「……は？」

アランはデューイと1年遅れてここに入った。

外国に行くなんて滅多になかった。

デューイはもともと仕事が海外派遣のようなもんだから、数え切れないくらい外国に行っている。

俺は事務的なのが主だから、こういう仕事はいままで1回くらい。

「やっぱ事務の方がいいなあ……」

アランはつぶやく。

「あははは。アランは仕事がそれだもんね。」

「海外つていやだろ？」

「そうでもないよ。海外だったらたくさんの人と会えるんだよ！」

「お前の好きそうな仕事だな。」

「でしょ！」

「ああ」

その後、外国に行くということに慣れてないアランはいろいろとデューイに手伝ってもらって羽目になる。

\*  
ロンドン フェリチターレロンドン支部内 支部長室にて

ジリリリリッ

黒電話がいきなり大きな音を立てて鳴り響いた。  
電話が大きくなったその場所は、少しレトロな雰囲気をかもし出し  
ている。まるでどこかの新聞社がイメージできる内装ではあるが、  
実際この部屋を使っているのはそれとは程遠い少し変わった組織だ。  
その一角の小さな部屋から黒電話はなっていた。そしてその部屋に  
は一人、机に突っ伏している女がいた。

ジリリリリッ

ああ。もう。うるさい。  
結構古い黒電話だしな。音が大きいし。やっぱそろそろ新しいのか  
ったほうがいいよな？

「はい。こちらフェリチターレロンドン支部。ご用件は何でしょう。」  
「さっきまでデスクで寝ていたジェネビィ・クウィンシィが少し寒そ  
うに毛布を肩に掛けていかにも不機嫌な声で電話に出た。」

「！」  
《ジェネビィお前すぐフェリチターレなんて言うなよ！ばれるだろ  
！》  
相手はコシヨコシヨと話している。  
声で分かった。いつも暇があればイタ電してくるあいつ。  
電話の主は一ノ瀬 紺だった。

「別にバレても警察はこちらの事気にもとめんのだろう？だったら  
大丈夫だ。」  
ふん。と言わんばかりの顔でジェネビィはそう返す。  
《何勘違いしてんだあほ。十分目つけられてるわ。》  
はあ。とため息のつく声が聞こえた。

ふーん。そんなもんなの。ジェネビィは曖昧な返事を返した。

しかし寒い。一応こちらは秋（ジェネビィは秋だと思ってるが実際  
は夏の終わり頃）だが、窓を開けっ放しで寝てたのが悪いらしい。  
毛布を肩に掛けても少し物足りない。後でコーヒーでも作るか。  
こう考えた後、ジェネビィは一ノ瀬の電話に驚くことになった。  
《お前窓開けっ放しで寝てただる。だから冷えてるんだよ。》  
ヒヒツと笑う声が聞こえる。

つていうかそんなの今はどうでもいい！  
なんで？くしゃみとかしたっけ？寒いって口走ったっけ？  
そんなこと口走ってないししてもいない！  
あわあわと混乱するジエネビィ。

「っ！？なっ！何故ぬし分かるのだ！はっ！もしかして監視カメラか！ローマ支部では飽きたらさずロンドンにまでも監視カメラを取り付けたのか！？」

《まあ待て待て。落ち着けて。そんなに焦るなっ》

一ノ瀬はなだめるように話しかけた。

いや。なだめているというか、見事に引っかかってくれたと笑っているようにも聞こえるが……

「落ち着けるかっ！監視カメラだぞ！大体いつ付けた！どこだっ！何処にある！私の寝言聞いてなにが楽しい！？」

一方ジエネビィはそんなことは察しなかった。

どこだ！どこだ！！

眠気が一気にさめた。監視カメラを捜そうとジエネビィはまわりをキョロキョロ見回した。

《俺あ監視カメラを取り付けたなんて一言も言ってないけどな》  
ニヤリと笑う一ノ瀬の顔がパツと浮かんだ。

少し落ち着いて考えた……

……

……

……しまった！

得意の早とちりだ！

しかも居眠りしてたの自分で暴露してるし！墓穴じゃん！？

「っ！」

「へえ、そうなんだあー。あの真面目とうたわれるロンドン支部の支部長がね。仕事サボって寝てたんですか。しかも恥ずかしい寝言つぶやいてえ」  
ニヤニヤしてる一ノ瀬の顔が目には浮かぶ。  
あの野郎。いつか絶対はめかえしてやる。  
とジェネビイは思うのだが、残念ながら一ノ瀬は外見はバカそうな奴だが、頭は相当いい奴だ。はめ返しても逆にはめられるのが落ちだろう。

「恥ずかしくない！」  
赤面するジェネビイ。

それを見越したように笑う一ノ瀬が見える。

「まあいいや。でな。今日電話したのは、そこで起こってる『連続宝石盗難事件』についてなんだ。知ってるだろ？」  
いきなり本題に入った。

一ノ瀬がまじめな声になったのでジェネビイは少しばかり戸惑った。

「あ……あ。最近少しだがニュースにも取り上げられるようになってきたな。今のところはごくごく小さい事件なんだが、そのうち手をうとうと思ってる。しかし、なぜ知っている？そんなに大きくもないのに。」  
気を取り直して真面目に話を進める。確かに。その事件は小さくて東京なんてところには到底報道されないような事件だ。どうせあいつら関連だろう。すぐに察することができた。

「わざわざロンドンの宝石店から電話あったんだよ！ロンドン支部がとらないから電話してきた！」

キンキンと受話器から怒鳴り声が聞こえた。

「すまん。最近仕事したくなくなってるな。居留守した。」  
しれっとした表情でジェネビイはそう返事した。

《あーあー！ ロンドン支部長お得意の居留守だぜ！》  
嫌味たつぷりの返事が返ってくる。

「私だけではない！ ほかの都市の支部長だってやっている！」  
その嫌味にいらつとしたジエネビイは少し不機嫌そうな声でそう返した。

《ああ。特にローマはひどい。何あれ。もうなんもしてないからね！ ただカプチーノ飲んで帰ってるだけだから！ 最近はこのアホ。監視カメラに気づいてわざとやってる。》

ローマ支部の話が出た。確か本部に弟がいるとかなんとか言ってたな。ぶつちやけどうでもいいが。

「元からそんなアホだろ。あいつは。大体あつちは何しても無駄だ。」  
重つとため息まじりにそう返した。

《あつ！ やべ。話ずれた。それで、結局こつちから2人助っ人送つといたから。》

「助っ人？」

《おう。明日着く。》

「そうか。わかった。」

ガチャン。

黒電話を置いて、ジエネビイは所長室を出た。

\*

ロンドン 某所 ホテルにて

「今日はまあまあだったんじゃない？」

ふふつ。とチャノはバーニーに話しかけた。

「まあな。ホントまあまあだった。」

チャノの質問にバーニーは答えた。

ホント。今日は朝から面倒くさかった。なぜかわからんがいきなりボスにたたき起こされた（いや詳しくは、起きたばかりで眠気を一気に吸い取られた、だが）。俺たちの組織『バズイスタ』のボスである一ノ瀬 麻は

「いや。なんかお得意様からの依頼が急に入って……ロンドンまで行ってきてくれない？ 休暇はほら2倍返しにするから！」  
とって真夜中からオフィスで仕事を頼んだ。

ぶつちやけ、休暇を2倍に返すということでしたしぶしぶ仕事を引き受けた。まあなんていうか。無理やりにも引き受けさせるつもりだったらしく、部屋の隅にはチケットとその依頼品に関する資料が置いてあった。

「いきなりロンドン行けなんて……ボスもすごいよね。」  
チャノが言った。

いきなり、夜中の回想から現実に引き戻されるバーニー。

「あの人は何ていうか……あっさりしすぎなんだよ。」  
バーニーは疲れたようにそう返した。

そしてまた回想の中。

確か……

途中でチャノとおち合つて、飛行機に乗り、今ロンドンのホテルにいるところだ。

おお。今日のドタバタ劇はそんな感じだった。

「どこに行けばいいのかな？今夜。」

そう聞きながらチャノは自分のノートパソコンを立ち上げる。

「知らねー。自分で調べる。俺あんの嫌みな野郎に寝てる途中叩き起こされたんだぞ。調べる暇があるなら、寝る。」

そういつて近くにあつたベッドにバーニーは横たわつた。

「俺だつて叩き起こされたさ。でもバーニーにと違ってピンピンしてるよ。あとそこは俺のベッドだよ。」

「うるせーえ…俺はお前じゃないんだよ。いいだろ。ベッドぐらいいちいち細けーよ。」

バーニーはあおむけにごろんと体勢を変え天井を眺めた。

「ふー。頑張つてくれよ。バーニー。今日は呑む約束でしょ？それまでにフェリチャーレとやらを探し出さないと。」

そう言いながらチャノは机の上に置いてあつたノートパソコンをパチンと開いた。

「ん？フェリチャーレ？」

「ああ。フェリチャーレだ。行つてたでしょ？ボスが。きっとフェリチャーレも来るだろうからつて。」

「なんだ。もう来てんのか？いや。早いね。行動つてのが。」

ふうつとため息をつきながら少し嫌味まじりでそうかえすバーニー。「いつものことだよ。今日も忙しくなるね。きつと。」

にこつと笑うチャノは少し楽しそうだった。いや、バーニーは休日をとられたのであまり楽しくはないが。

「今回誰来るの？」

楽しそうにチャノは聞く。

「しらね。……あーでも、一ノ瀬はなんか名コンビがくるって……言ってた気がする?」

「名コンビ?結構年がいった人でも来るのかな?それならそれで体力では負けないけど。」

「おいおい。名コンビだったって、俺たちと同じ年くらいの奴らだぞ。」

「へえ。名コンビって言うからってつきり中年の方が来ると思ってたよ。」

「中年って……ああ。でも、日本のドラマでいるよな。中年の名コンビっての。どうやら俺らにその縁はなさそうだけど。」

「そうだね。バーニーと一緒に名コンビって言われるのは俺も嫌だなあ。」

「こつちだつて嫌だわ。このアホが。」

ごろんと横になったバーニーは自分のかばんからノートパソコンとさつき空港で買った棒つきキャンディを取り出した。

この棒つきキャンディ懐かしいな……

小さいころよく食べてたっけ?

そういえば、ここら辺。

よくガキのころに近所の友達とかと一緒に走り回って遊んでた場所だな。

懐かしいな……この風景とか。

少し、部屋の窓の外をのぞいてみた。

昔はあつたはずのお菓子屋。

今そこは大きく真新しいビルが建っていた。

よく、そのお菓子屋でこのキャンディ買って食ってたもんだけど……

・  
・  
跡形もねえな……

町並みはそう変わってはいなかった。

ただ、昔あったはずのおもちや屋やお菓子屋。雑貨屋さんなどがなくなり、今その場所は序家の店へと変わっている。

おもちや屋の爺さんとか……どうしてんだろっな？

お菓子屋のおばさんとか……今じゃもうばあさんか。

そっぴや雑貨屋は若い人がやってたよな？たまにいたずらしかけたりして……楽しかったなあね。

「なに？小さいころでも思い出したりとかしてた？」

ふふつとノートパソコンで何かをしながらチャノがいきなりそう聞いてきた。

「……うるせ。」

見事に凶星だったので、バーニーはふてくされてそう返す。

「いや。いいと思うよ？たまには思い出に浸るのも。そっか……」

ロンドンとかって建物大切にするもんね。町並み変わらないんだ。」

「いや。菓子屋がつぶれてピカピカのビルなってる。」

「老朽化が激しかったみたいだね」

「みてえだな。」

あくびをしながらベットに戻り、バーニーはノートパソコンをいじることに決めた。

\*

イギリス ロンドン支部 事務室にて

「あつ！支部長！」

バジルは支部長室から出てきたジェネビィに声をかけた。

「ん？バジルか？今日は休みのはずだろう？」

そう言いながらジェネビィはバジルの机の上に置いてあったコーヒ  
ーを取って飲んだ。

「ええっ！？そうなんですか？」

バジルは驚いたようにそう答えた。

「ぶっ！？甘っ！」

バジルのコーヒーは予想外に甘く、甘さ控えめのジェネビィは思わ  
ず吹き出した。

「あつ！何勝手に飲んでるんですか！支部長。それにこの位甘くな  
きゃコーヒーはおいしくありませんよ！」

「ぬし、絶対糖尿病で死ぬタイプだな。」

「失礼な！俺は健康です。」

そういつてジェネビィから自分のコーヒーを取り上げて一気にのみ  
ほした。そして・・・

「・・・甘さが足りない・・・」

そうバジルはつぶやいた。

「たっ！足りないだと！ぬし、まだ砂糖を入れる気では・・・」

驚くジェネビィ。そしてバジルの返事はやはり、「当たり前です。」  
だった。

「で？いきなり起きてきてどうしたんですか？」

角砂糖をあのかつたるいコーヒー（いや。もはやコーヒーでもない液体。）に2つ入れながらバジルはそうジェネビィに問いだした。「ん。たたき起こされてな。電話に。・・・てゆうかぬなぜ私が寝てたの知っている？」

そついいながらジェネビィはバジルのすぐ近くにある給湯室にお湯を沸かしに行った。どうやらコーヒーを作るらしく、ジェネビィの隣にはインスタントコーヒーの粉が入ってるビンがおいてあった。

「資料渡しに行こうと思って支部長室入ったら寝てましたもん。支部長。あ、後窓開けっ放しでしたけど体冷えてませんか？」

「冷えた。・・・そうか。今日お前だけか・・・」

バジルと会話してて気づいたが、周りがしいーんと静かだった。

「だから休みなんですけど間違えて来ちゃったんですって！それに休みでもやらないといけないことがあります、どのみち来るんですが。」

「ふん。静か過ぎていやだな。」

「で？支部長の電話で起こされた件は？」

「あ・・・ああ。そうだったな。すっかり忘れていたよ。本部のノ瀬から電話でな。」

「電話の内容は？」

「ロンドンの宝石店からの電話居留守して、それをつっこまれた。」

「ははは！居留守ですか！支部長ずるいですよ！」

「それで、本部から2人助っ人送ったから早く解決するように！と」

「なるほどね。」

「そうだ。そのことでお前に頼みたいことがあるんだ。」

「なんですか？」

「そうそれが・・・」

ジェネビィが頼みごとをしようとしたと話し始めたが、いきなりヒューッ！とお湯が沸いたので急いでコーヒーを入れにジェネビィが行った。

「甘さひかえめですか？」

机に座っていたバジルは自分の椅子をくるつと給湯室のジエネビイの方に向けて話し始めた。

「いや。ぬしのコーヒーを飲んだから、無糖だ。」

「あれは甘くないほうですよ。」

「絶対違う。それでぬしに頼みたいことが、最近ロンドンの宝石店の……」

「これでしょ？」

ジエネビイの話に割り込んで、バジルは数枚のコピー用紙を見せた。その正体は、コピーされた新聞の切抜きやインターネットからのコピーだった。

ジエネビイは出された数枚のコピー用紙を受け取り、読み始め、驚いた。

「ぬし！何故これを！？」

数枚のコピー用紙の正体は一ノ瀬の言った『ロンドン連続宝石盗難事件』についてのものだった。

「新聞記事を読んでも、そろそろ支部長が手をうつ事件だと思っていたし、何しろすごく計画的な犯行に見えるんです。それで。今日もこのことについていろいろ調べようと思って出勤したんです。」

「なるほど。確かにぬしの言うとおり計画的な犯行に見える。」とジエネビイが作りたてのコーヒーを片手にこちらへ来た。

「やっぱり。そのことについて調べてほしかったんでしょ？」

「ああ。まったくその通りだよ。」

ずずつと音を立ててジエネビイはコーヒーを飲み始めた。

「いや。しかし助かった。これでぬしに説明する手間が省けた。」

「いや。仕事ですしね。」

バジルは少し嬉しそうに笑った。

そして続けて

「この事件。何が狙われてると思います？」

「何って……宝石だろう？」

ジェネビイは思わず顔をしかめた。

「いや宝石ですけど。『青い宝石』。知りませんか？2年ぐらい前に  
ですかね？中国で珍しい宝石がとれたらしいんですよ。」

「珍しい……相当の値打ちなんだろうなきっと。」

「相当どころか……あの宝石買うくらいお金あるなら一生働  
かなくても贅沢せず生きてけるでしょうねきっと。」

「本当。わからないな。それを欲しがるのが。」

「僕もです。あ。ところで支部長今度の日曜あいてます？」

いきなり話を変えてにこりと笑いながら話しかけてきたバジル。

「残念ながらその日は家にこもって録画してためておいたドラマや  
らバラエティやらニュースやらを見るつもりだ。」

「ちょ……ニュースって……録画してみたら意味ないで  
しょう。」

「趣味だ。過去の事件をじっくり見て推理することが。」

またしてもしれっとした顔で話すジェネビイ。

「どんな趣味ですか！……もう支部長いつそ警官になればいい  
のに。」

そういった跡で警官姿のジェネビイを妄想したバジルは結構いける  
なと思う。

「『青い色の宝石』……か」

ジェネビイはふうとため息をついてコーヒーを飲んだ。

「あ。警官の話スルーしましたね支部長。」

バジルもまたため息をついて残っていたコーヒーを一気に飲み干し  
た。

「犯人はその宝石の場所が知らないのか？」

ふと疑問を抱いた。

何件も起こっているその事件は、青い宝石だけを狙った犯行としてものめずらしく新聞やニュースで取り上げられている。しかし、狙っているものがその高価な『青い宝石』ならとくに見つけて事件は終幕を迎えているはず。まだ終わつたないってことは犯人が宝石がどの店にあるかをわかつていないということになる。

「いやでも……」

バジルは小走りで自分のパソコンに向かう。

バツと急いでパソコンをたちあげてデータを引き出した。

「あ……犯人は支部長の推理どおり場所はわからないんでし  
らみつぶしに回っているらしいですよ。……だけど今夜で連  
続窃盗事件も終わるかもしれませんね。」

「どうということだ？」

ジェネビイがそう聞くとバジルはすばやくマウスとキーボードを使  
い始めた。

「これです。……いいですか？ どうやら犯人はこのロンドンの  
どこかにあつて、その宝石が『gem』っていう系列の店にあるこ  
とはわかつているみたいです。ほら、ロンドン市内のこの店だけ襲  
われてるでしょ？」

画面に指をさしてそれぞれのデータも見せるバジル。

「……確かに。」

「この系列の店はロンドン市内でも8件しかありません。襲われた  
のは7件。……つてことは。」

「……後1件か。場所は？」

「えーっと……ここから近いです。」

「といったらフェンチャーチーストリート駅の方か？」

「そうです。」

「よかった。これで、何とか本部の特務員のやつらも仕事がパッ  
とできるな。」

ふうつとため息をつきながらジェネビイはそうつぶやいた。

「？特務員来るんですか？」

「ああ。・・・何ていったかな？アランってやつとデューイって言うニューヨーク支部長がかわいがってたあの子供が2人で来るぞうだ。」

「アランってローマ支部長の弟ですよね？」

「！そうなのか！・・・ちやらんぼらんじゃなきやいいけどな。」

「大丈夫ですよ。」

「そういいながらバジルは立ち上がり、

「あ。少し買い物言ってきます。」

「といって外に出て行った。」

\*

ロンドン 空港にて

「着いたね〜ロンドン！」

「空港をでたデューイは嬉しそうにアランに話かけた。」

「ああ…疲れたけどな。」

「アランとデューイがロンドンに着いたのはジェネビィとバジルがロンドン支部で会話をした次の日の事だ。」

「ロンドン支部はすぐ着くよ。」

「そう言っただけでデューイがタクシーを呼びに道路にかけていった。」

「そっだとうれしいよ。」

アランはため息をつきながらそう言った。

「アランー！乗らないのぉ」

タクシーを止めたデューイはそう大声を出した。

「ああ。乗る」

\*

「んー？青い宝石い？」

一ノ瀬が出社したその直後にロンドン支部からあの連続盗難について電話がかかって来た。

《ああ。この事件、かなり面白い。》

ジェネビィはそう言う。

バジルが昨日調べた情報を一通り話終えたところだった。

「青い宝石ね？…面倒くせえな。」

爪をいじりながら一ノ瀬はそう答えた。

《なぜ、探してると考えた。》

ジエネビイが落ちついた様子でそう聞く。どうやら何となくだがジエネビイもそう考えてたらしい。

「考えてみるよ。青い宝石が大好きでもない限り安っぽい宝石盗るわけないだろ。何かあるんだ。何か探してるものが。しかも連続盗難はまだ続いている。俺が考える限り、目当てのものでないならば今日も起こるな。盗難事件。」

《ふん。昔からぬしの事は好かないが、その頭のキレるところはいところだ。》

ジエネビイが鼻で笑った。

「なにそれ。誉めてんの？」

《ああ。べた褒めだ。》

「それはべた褒めって言うんじゃない、素直に誉められないって言うの。」

《うるさい黙れ。しかし奴らがなにを探してるのかが知りたいな。》

「任せろよ。それは俺が調べる。」

《何か心当たりがあるようだな。》

「ああ。事件を動かしてる張本人にちよつとな。」  
くくつと一ノ瀬は笑って電話を切った。

\*

東京 オフィス街 某所 バズイスタ本部にて

バズイスタ本部にいた一ノ瀬 麻は暇そうに机の上にあつた数枚のジエンガの板を並べてドミノをし始めた。

「んー…暇だね。」

麻はニコニコ笑いながら人っ子一人いない部屋でそうつぶやいた。

ふとバーニーとチャノの事が気になった。別に心配はない。バーニーだけだったら心配するけども、チャノがいるから大丈夫だ。

ただ、説明不足のような気がした。

「少し説明不足だったかな？まあいいや。」

と。そうつぶやいて2人のことを気にするのをやめた。

兄さんは気づいたんだろうなあ…

2人のことを気にしなくなったとたん、そのことが頭に浮かんだ。

一ノ瀬 紺と一ノ瀬 麻は兄弟で紺の方が2つ年上だった。

外見は似ているといわれる。

ただ雰囲気が違うと、何度も言われた。

しかも、それぞれの職業とは全く違う雰囲気だと。

兄の方は外見ぱつと見てどこかの不良を思い出すが、あちらの役職

は正反対の人助け組織と異名を持つ『フェリチターレ』の所長だ。一方、麻のほうは外見いかにも人のよさそうなおとなしい紳士といわれる。

しかしこちらの職業もまた、世界中のあらゆる金目の物を盗っていく『バズイスタ』のボスをやっているのだ。

外見が必ずしもすべてではない。

このことを考えると、その言葉が頭に浮かんでくる。

別に兄のことは嫌いではない。今でも普通に会っている。ただ、兄が自分にとって最大の敵である。あちらもそうなのではないかと自分は思ってる。ってというか、そうになりたい。

前にも北京に4人ぐらい行かせたがまんまとやられた。

4人とも逮捕されたってわけではない。お宝の争奪戦に負けた。何しろあっちには逮捕権なんてものはないから捕まえられるのだが。なので今回はロンドンで逃げ切ってやる。

ロンドンの争奪戦で逆転だ。

そう考えていたとき電話がなった。

\*

ロンドン市内

「ここどこだよっ！」

ロンドンの路上でアランは嘆いた。

「アランー……俺お腹すいたよー……食べ物ー……隣ではデューイがわがままを言っている。

「ばかやろう。こんなところで食べ物なんか食ってみろ！言っとくけどロンドンのレストランはハンパなく高いんだぞ。俺を殺す気か。」

「アランはどうなってもいいからごはん〜！」

「よくないわ！」

「じよ よえんのサラダと焼肉がいいなあ〜」

「アホ。ロンドンのご真ん中に よじよえんなんてあるかよ。」

「えー……じゃあカツ丼〜」

「じゃあじゃねえ。そんなもんあるかよ。大体お前ロンドン支部の場所知ってるんじゃないのかよ。『あつ！ロンドン支部ってこんなところにあるんだ』とかいってただろ？」

「ごめん。南極と間違えた。」

「間違えられるか！こんなところ！どー見たって違っただろ！大体南極にうちの支部はねえ。」

「いつか出来るよ！」

「出来るわけないだろ。」

ぶつぶつとつぶやきながらアランとデューイはロンドンの街を歩きまわった。

くそぞ。迷った。

頭の中でその言葉が浮かんでくる。別にデューイを責めてはいない。いつもの事だし。どうする。任務実行の前に支部がどこにあるのか分からず、結局任務失敗なんて…そんな特務員（デューイたちのように海外派遣が多く銃を持ち歩ける奴の事を特務員といって、名の

通りアラン達のような事務員とは違い、特別な仕事につく。(なんて聞いた事ないぞ。

ああああ…

ため息をつきそうになったアラン。しかし、ため息はつけなかった。

どんっ！

バサバサバサ

誰かとぶつかった。と同時に何か落ちる音が聞こえた。

「あっ！スイマセン。」

どうやらぶつかったのはデューイの方らしい。英語であやまっている。

「ううん。大丈夫。気にしないで。」

相手の男の方もそうこたえる。

「なにやってんだよ。お前。」

「うん。人とぶつかった。」

相手の方は誰か付き添いがいたようだ。ぶつかった相手が黒髪で付き添いの奴が金髪。

「あああっ！集めなくていいですよ！俺がとりますから。」

道路に落ちた数枚の紙を相手とその付き添いが集めだしたので、デューイが慌てて集めようとした。仕方なく俺も。

「ふふ。バーニーも拾ってくれるんだ。へー。そんな優しい一面を持っていらしたんですね。」  
黒髪のほうがそうおちよくった。

「うるせえ！拾わねーぞ！」  
金髪の方は顔を赤らめて怒る。

「別に拾ってほしいって言ってないよ。俺。」  
ニコツと、そして金髪の奴のその後の態度を見通すかのように笑った。

「チャノオ…てめえ覚えてろよ。」

「ああ！アラン！紙が飛んでいつちゃう！」  
二人の会話をほとんど盗み聞きしてたアランはデューイの声でハツとした。

「だあぁっ…めんどくせえ！」  
アランは仕方なく飛んでいった紙を追いかける。

「頑張つてえ〜アラン〜」  
デューイはそう呼びかけた。

「なんで俺が追っかけてるんだ…お前て追っかけるよ。デューイ  
いー」

飛んでいった紙をとりに行って帰って来たアランはデューイの頭を軽く叩いた。

「わーいたい。」

「ウソつけ。棒読みじゃねーか。」

そう言いながらバラバラになっていた数枚のコピー用紙と紙をまとめて相手に差し出した。

「どうも。助かったよ。」

ニコリ。そう黒髪は笑った。

「いえいえ。こっちこそ。スイマセン。」

そしてなぜかアランがあやまる。

「さあせんー。」

デューイは適当にあやまった。

まあ最終的には

「失礼だろ。ちゃんとあやまれ。」

と無理やりアランに頭を下げさせられた。

「ふふ。おもしろいね。君たち。少なくとも、そこら辺の会社員ではないよね。」

「えっ!?!」

「いや。なんでもないよ。じゃあまた会おうね。」  
「  
そう言いながら黒髪は手を振って去っていった。」

\*

「なにやってんだよ。」

「ふふ。ごめんね。」

あの2人と別れてすぐ、バーニーとチャノは話はじめた。

「いやあ。そんなに大切でもない書類一生懸命拾ってもらって……  
ありがたいなあ。」

ニコツとチャノは笑った。

「……同じだな。」

「なにが？」

「いや。ボスとキャラかぶってんなあ……って。」

「キャラ？ああ。まあね。」

「認めた。すんなりと。」

「だって否定できないでしょ？」

「まあな。」

「でも、少しだけだけだよ？」

「何が？」

「キャラ。」

「そうか？」

「だって、ボスってによによしてるじゃん。俺はきちんと笑ってる。」

「笑うにきちんとくそもあるのかよ。」  
「あるさ。ボスは中途半端だ。」  
「めんどくせえ。」  
「それに、きつと内面は正反対だよ。」  
「なんじゃそりゃ。」  
そんな会話を続けながら、2人はホテルに入っっていった。

\*

「やつとか。ぬしら。」  
ジエネビイは夕日のオレンジ色がかった支部長室でコーヒーを飲んでそういった。  
「いや、迷う人はそうそういないんだけどね……」  
バジルはものめずらしそうにそう答える。

「うっ……すいません。」  
アランはそうあやまる。  
「支部長！このマクド ルドは俺、口にあわないであります！」  
デューイは敬礼した。  
「アラン……だったか？」

ジエネビイはそう聞いた。

「は・・・はい。」

「なぜこのアホを連れてきた。」

そういつてデューイの方を指差す。

「知りません。ほとんど適当に一ノ瀬・・・じゃなくて所長に頼まれたので。」

「支部長！俺アホでありますか！」

「ああ。確実にアホだ。」

「マジですか！わかりました！じゃあアホの俺はもう一回近くのマクド ルドに行つて来ます！」

「ああ。二度と帰つてくるなよ。」

「っ！かお前。さっき口に合わないつて言つてただろ！？」  
アランはつつこむ。

「口に合わないけどチャレンジ！」

デューイはそのまま支部長室から出て行つた。

「なにその無駄なチャレンジ精神！？」

またつつこんだ。ジエネビイは静かにコーヒーを飲む。そしてバジルは

「俺、調べ物してきますね。」

といつて出て行つた。

「それでだ。うちのバジルの推測によれば今夜。この宝石店でおこるらしい。」

そういつて、ジエネビイは連続宝石盗難事件について話し始め、狙われるという宝石店の地図と少しの資料を渡してくれた。

「今夜ですか？」

地図と資料を見ながらアランはそう聞いた。

「ああ。この調子だと今夜だ。」

「じゃあなるべく今日で捕まえてほしいんですね？」

「まあそうゆう事だな。」

「そうですか。」

そういつて、アランは支部長室を出ようとした。

「ああ。後。」

ドアノブに触れたその時、アランは立ち止まりそして、ジエネビィの方を向いた。

「俺、事務員ですからデューイみたいにスゴいこと出来ませんよ。」  
ジエネビィは目を見開いた。

そして笑った。

バタン。

アランは支部長室をあとにした。

「ふん。よく言うな。一ノ瀬の一番のお気に入りではないか。」  
そういつて、うとうとし始めたジエネビィだった。

\*

「デューイ・シャムロック。18才。本部の特別業務員。ずば抜けたその素早さと、身のこなしを得意とする。特別業務員の中でもかなり実力のある人材。」

そうバジルが話始めたのは、アランが支部長室を出たすぐ後だった。

「……デューイのファンかよ。あんた。」

アランは驚いたように、とゆうか少し引き気味に話しかける。

「いや。こんなもん調べればすぐでてるよ。」

バジルはいつもの激甘のコーヒー……いや。今回は紅茶をのみながら  
そう答え、続けた。

「アラン・チエステイノ。21才。本部の事務員。観察力、推理力共にずば抜けていて、おまけに運動神経抜群。最早事務員というよりも特別業務員。」

「…なんじゃそりゃ。」

アランはため息をつく。

「へー。アランすごいじゃん。これだったら今回は安心だね。」

「ん？スタンフォードさんは？一緒に行かないんすか？」

バジルの下の名前はスタンフォードで、年も少し上なので普段は敬語を使うようにしている。

「ん？ああ。俺は事務方だしな。それにGPSの探知とか、今回の事件について探り

入れないといけないし。ま。ずっとデスクにいるつもりだ。今夜から住み込みだあー。」

バジルはそういつてあくびをした。

\*

《よおー。》

「なに？兄さん。なんかあった？」

一ノ瀬 麻のつた電話は兄の紺からだった。

「この前はどうも。北京ではまんまとやられたよ。」

《お前まだ北京引きずってるのかよ。》「ああ。あれは悔しいよ。」

《それはそうと。なあ、少し話がしたい。出られるか？》

「いいよ。ちょうど暇だったんだ。」  
「じゃあ、駅前のファミレスで。」  
そういつて紺からの電話はきれた。

\*

ロンドン市内 フェンチャーチーストリート近く 宝石店にて

「いよいよだね！」

デューイは玄関をこっそりカウンターの下から見る。両手にはポツ  
プコーンと紙コップに入ったオレンジジュースを抱えていた。

「いよいよだが、そのポツプコーンとジュースは止める。緊張感な  
さ過ぎだろ。つうかマクド ルドにポツプコーン売ってたか？」

アランもまたカウンターの下でひそひそとつつこむ。

「バカだね！アラン！これは支部の電子レンジでチンしたんだよ！」

「お前にバカって言われる筋合いないわ。つうかいい加減そのポツ  
プコーンとジュース止める！緊張感考えろ！」

そういつてデューイからポツプコーンとジュースを取り上げた。深  
夜の宝石店内に響く二人の声。

アランたちがいるのは狙われる予定の宝石店の中のカウンターの下。  
ここは玄関がキレイに見えるし、このカウンターは玄関の真ん前に  
あるので入ってきたらすぐに泥棒を倒せられるというメリットがあ  
る。逮捕権がないので捕まえる事は出来ないが宝石を盗まれる事を  
止める事が出来る。

「なんとしても捕まえるよ。」

アランは言う。

「ラジャー！」

そういつてデューイはポップコーンをアランから奪い取ってもしや  
もしやと食べ

始めた。

\*

ロンドン市内 フェンチャーチーストリート

「バーニーさあ、仕事中にポップコーンはどうかと思つよ。」

深夜のロンドンの通りでチャノは言う。

この通りをあと少しまっすぐ行けば、今日行く予定の宝石店だ。

もちろん。婚約指輪やらを買いに行く気はない。(って言うか、渡

す相手なんていないしね。)盗りにいくのだ。

だってそれが仕事だしね。

内心チャノはそう思った。

「ポップコーンなめんなよ。おいしいぜ。あ。なくなった。」

バーニーはそういつた。

「なくなってくれてうれしいよ。隣でもしやもしやされるのいやだしね。」

「もっ・・・もしやもしや言うな!」

「だって本当でしょ?違うの?」

「・・・もしやもしやだけど。」

「やっぱりもしやもしやじゃない。・・・もしかしてキャラメル味?」

「ああ。」

「なんだよ。バーニー言ってくれれば僕が食べてあげたのに・・・」

少し肩を落しながらチャノは答えた。

「何その上から目線!?!」

「だってバーニーは俺の後輩じゃん。」

「何さらりと嘘ついてんだ。同期だ!同期!」

そういつてバーニーはつつこんだ。

「えー知らなかった!。へー。バーニーって人いたんだ!。」

明らかに棒読みのチャノの返事が返ってきた。

「今度は存在すら消すか!何!なんかひどいことした?」

「うん。俺のポップコーン食った。」

「その話まだ続いてたの!?!かあれは俺が買ったんだよ!ちゃんとホテルの電子レンジ使ってチンしたんだよ!」

「インスタントでキャラメル味ってできるの・・・?」

その質問をバーニーに投げかけたとき、二人の怪しい影が自分たちの数十メートル前を通っていった。

その影に2人は少し驚き、チャノは笑った。

もしかしたら。

あの2人が使えるのかもしれないと。

まあ。俺の予想が当たっただけだね。

チャノがその「使えるかもしれない」とゆう予想を持ったのはちよ

うど今回の狙うべき宝石店が数十メートル先にあったときだった。

\*

東京 ファミレスにて

「ん、俺オレンジジュースで。あ。あとショートケーキもつけてくれよ。」

そうウエイトレスに注文をして、ふうつとため息をつきながらノ瀬 紺はファミレスの入り口をみた。

麻と駅前のファミレスで待ち合わせをしたが、来るかどうか心配だった。

たまにすっぱかす時があるからである。

まあいいや。すっぱかしたらその時。俺は俺のやり方でいかせてもらう。今回の

この事件も麻がやってるのはほぼ確実だ。しかし、何故『青い宝石』

なのかがど  
うしてもつかめなかったのである。

「ごめん兄さん。」

紺の後ろから声がした。

麻である。

「おせーんだよ。アホ」

「遅くないよー。兄さんが早いだけ。」

「そうでもないっての。」

「まあ。いいじゃん。」

「よくねー」

「おごるから」

「許す。」

おごるといわれたので紺は即答で許した。

「で？話って？」

麻が聞いてきた。

「いきなりかよ。少し世間話してからしよつと思っていたのに・・・」

「」

「だって気になるじゃん。」

にこつと笑った。麻の得意技である。

「んじゃ。単刀直入に。ロンドンの連続宝石盗難事件あれ、お前だろ。」

そう紺はきいた。

「ふふ。ホント単刀直入。うん。そうだよ。」

また麻は笑った。

「やっぱりなー……もうめんどくさいの何の……」  
はーっと紺はため息をついた。

「めんどくさいって……大体北京で見逃してくれたらわざわざロンドンで騒ぎなんかおこさないよ。」

「なにそれ。」

「あれからお得意さん怒っちゃって。大変だったんだよ。」

バズイスタは金目の物を世界中から盗んでいくのだが、そのほとんどが裏ルートで世界的有名な大富豪や政治家に依頼されて売買している。

「そりゃいいことだろ。大助かりだアホ。」

「さつきから人のことアホアホって言ってるけど、兄さんもアホだからね。人に言えないから。」

「お前アホなめんなよ。アホでも所長してるから。お前の部下たくさん倒してっ

から。」

麻にそうやり返したらウエイトレスが先ほど紺が頼んだオレンジジュースとショートケーキが出てきた。

「あ。ついでに俺も頼んでいいかな？」

紺の前にオレンジジュースとショートケーキを置いたウエイトレスに麻はそう聞いた。

「はい。どうぞ。」

ウエイトレスは持ち前の営業スマイルでそう返した。

「ん。じゃあ、チョコパフェとホットコーヒーで」

にこり。麻は愛想よく笑った。  
すぐお持ちいたします。そういつてウエイトレスは厨房に戻っていく。

「あ。話がずれたよ。兄さん。兄さんの得意技だよ。遠回りして

忘れかけた頃に本題もってくるの。」「

「ちげーよー。勝手にずれるんだよ。」「

そういたずらっ子そうに笑った紺はケーキを食べ始めた。

「ほら。わざとだ。」「

そう麻も笑った。

「そーそー。後ひとつ！聞いていい？」

紺は麻の方にフォークを向けてそういった。

「どうぞ。」「

「青い宝石ってなに？」

「……兄さん。わからないでロンドンに人送ってんの？」

ダメか？と真面目な顔で答える紺。はあ。とため息をつく麻はあきれ顔だった。

「んだよ。知ってるなら教える。」「

少し不機嫌そうな表情で紺は言う。

「いいよ。教えてあげる。」「

これが自分の兄である。ふうつとため息をつき麻は口を開く。

\*

ロンドン市内 フェンチャーチーストリート 宝石店にて

ガラスの割れる音がしたのは、デューイがポップコーンを食べ終えてしばらくしてからだった。

「おお。こりやまた大胆に入ってきたな。」

テーブルの方に隠れていたアランは玄関をのぞき見た。

「いままでの犯行でこんななかつたよ？」

一足遅れてデューイもアランと同じ行動をとった。

「ああ。少しおかしいけどな。まあ。様子見だ。」

「そうだね。」

入ってきたのは2人。身長から見ると男のようだ。

2人も店内をうろつき始めた。宝石の入ったショーウィンドウを見始める。

そろそろか？

ここのセキュリティは前、一ノ瀬が新しくするように注意しているはずだ。

前よりかまじだろうし、ここは宝石店だ。そこら辺のスーパーのように簡単なセキュリティではないだろう。ショーウィンドウを割った時点で警報が鳴るだろうし、監視カメラも付いている。ここの宝石店のオーナーにも協力してもらっているから、24時間態勢の警備なんだろう。

すぐに警察はやって来るだろうから、俺たちが一足先に宝石を取り返して、犯人をそこら辺の柱にでも縛り上げときゃ上出来だろ。

「アラン！ショーウィンドウ割るよ！」

デューイが言った。

一人がハンマーを振り下ろした。

パリーンッ！

ガラスの割れる音が鳴ると同時に警報が鳴る。

来た。

犯人らしきその2人は手当たり次第にガラスを割っていく。どうやらとつと逃げるのではなく、出来るだけ盗って行ってぎりぎりで逃げるらしい。無駄だ。

そろそろか。

そろそろ、逃げ出すだろう。

そう思ったアランはデューイの方をちろりと見た。

初めてのこいつとの任務のときの合図だったが、覚えているだろうか。

少し心配だったが、どうやら通じたらしい。

アランとデューイはピストルを構えた。一応実弾だが、相手に致命傷は負わせない。フェリチターレのルールだ。

そしてアランはデューイに向かって手でカウントし始めた。

3 . . . . .

2 . . . . .

1 . . . . .

バツ！

アランたちは勢い良くテーブルのしたから立ち上がった。

犯人らしき2人は驚いた。  
そして

「サツか!？」

一人がそう聞いた。

「警察じゃないけど、警察的な何か!・・・で、当たってる?ア  
ラン?」

犯人らしき2人のうちの質問してきた奴に銃口を向けながらデュー  
イは聞いた。

「ま・・・あ・・・。当たってるというか、なんというか・・・  
」  
アランはそう答えた。

暗い店内の中、2人の声が響き渡った。

この暗い中で犯人らしき2人の顔は見えない。

「てめえらふざけてんのか!？」

警戒している相手はそう声を上げた。

「ふざけてないよ。だってホントはホントだし」

そういつてデューイは銃を下ろして相手に向かって歩き出した。

「おっと・・・こっちに来るなよ。こっちは銃持ってたぜ?」

そうデューイは脅された。が、

「こっちも持つてるよ!」

と相手にしない。

脅しを無視してそのままスタスタと歩いてくデューイにアランは少  
し驚かされる。

よくもまあ、驚きもせずに・・・

これも経験の差なんだろうな。

ゴクリとつばを飲んでアランはそう思った。

「近づくなあ！」

パァン！

タンツ！

2つの音がほぼ同時に聞こえてきた。

脅しも無視したデューイにおびえたのかなんなのか、相手は発砲してきた。

幸いデューイには当たってない。

つつか、そのまま歩いていたら確実に当たってた。

当たってなかったのは、デューイがジャンプしてよけたから。

しかも普通の奴ではありえないような高さまで。

デューイはそのまま一回転して、発砲してきた奴の真上に着地。もちろん、相手は気絶。

「つと・・・危ない！」

とん。と音を立てて着地したデューイはそう呟いた。

そしてアランの方を振り向いて、

「アランくアランく。弾当たってない？」

アランは無言のままデューイに駆け寄り、

「アホっ！俺が合図するまで動くなよ！グダグダじゃねーか！大体弾当たったらどうする！お前引きずって犯人捕まえる訳にはいかないだろ！」

と怒鳴り始めた。

「ひつどあー！そんなに怒鳴らなくてもいいじゃん！ずーっとあの空気は耐えられないよ！それに一人倒したじゃん！」

「それとこれとは関係ない！毎回毎回お前は考えもせず動きやがって！」

「毎回毎回ってアラン俺と一回しか仕事してないし！」

「あの一回でお前は何回も後先考えず動いてただろ！」

「なっ！でもそのおかげで今までの仕事成功してきたんじゃん！」

「それは幸運だっただけだろうが！」

アランの怒鳴り声が店内に響き渡り、デューイは口を開く。

それと共に、

「くそう！」

残った犯人らしき奴が盗んだ宝石の入ったカバンを取って出口のほうまで走って

いく。

「あっ！待て！」

先ほどまでケンカをしていた二人も逃げていった奴を追い始める。

犯人らしき奴は宝石店のドアを開けて外へ飛び出した。

\*

アラン達が店内で犯人を待ち構えていた時、バーニーとチャノの二人は店に入らず入り口の方で待ち構えていた。

「なんで中に入らねんだよ。時間もつたいねーよ。」  
バーニーはそうチャノに聞く。

「そうせかさなくてもいいでしょ？もう少し我慢だよ。」  
にたつと笑ってバーニーに返事をかえす。

「こんな所で待ってて朝になったらお前のせいだからな。そんな時はお前俺の一日中奴隷だかな。」

「なにその条件。バーニー変態いゝ。まあどうせ俺が勝つよ。その賭け。ちなみにバーニーが負けたら一日中俺の言うことちゃんと聞くこと。」

「上等だ。」

バーニーが言ったその時、店の中から銃声が聞こえた。

『！？』

二人とも驚いた。

「おい。誰かいるのか？」

バーニーはそう聞く。

「今の銃声で分かるでしょ。いるよ。バーニー、向こう側に行つて。」

「

そう言つてチャノは玄関の端のほうを差す。

「俺はここで構える。人が出てきたら迷わず捕まえて。」

バーニーとチャノはそう玄関の両端を囲んだ。

その時ちょうど、玄関が開いたんだ。

\*

バンツ！

玄関のドアはそう勢いよく音を立て、深夜のロンドンの街に鳴り響いた。

それとほぼ同時にひとりの人が飛び出してくる。

いきなり出てくるので店の外の入り口の両端で構えていたバーニーとチャノは驚いた。

そいつはバーニーのいる方へ逃げようとして、バーニーに向かって来た。

「バーニー！そいつ！そいつ捕まえるんだ！」

チャノはとっさにそう叫ぶ。

バーニーはそいつの腹に一発パンチを入れた。

案の定そいつは倒れた。

「こんなもんかよ？」

「こんなもんだけど、ちょっとやりすぎじゃない？」  
チャノはそう答えた。

「あいつは!？」

いきなり後ろから声がした。聞いたことのある声だ。

バーニーとチャノが振り向くと後ろには昼間、道でぶつかった金髪と赤毛の2人が出てきた。  
そう。

アランとデューイだ。

\*

「あいつは!？」

外に走っていった奴を追っかけてそういったのはアランだった。

アランの後からデューイもひょこつと出てくる。

きよるきよると見回したらふとアランが立っている位置から2メートル先でどこかで見えた顔の2人と先ほど逃げた奴がのびていた。

「あの・・・そいつどうしたんですか・・・？」

少し驚くアランはそうチャノとバーニーに聞いた。

「あ・・・えーつと・・・いきなり・・・倒れたんだよな。チ

「ヤノ。」

少しあわてて両手を振りながらそうバーニーは言った。

「バーニーが倒してくれたんだよ。」

にこつと笑いながらチャノはそう答えた。

「おいっ！そんなこというなよ！俺が変な感じじゃん！知らない人殴ったみたいない！」

「だってホントの事じゃん。ウチは正直が売りだったのでモットーなんだよ。」

「どこの店長だよそれ！チャノいい加減にしるよ。」

「バーニーだからいいじゃん。からかっても。」

「なにその”バーニーだから”って！」

「バーニーだからバーニーだからだよ。」

2人の喧嘩を見ながらアランは必死でその2人とどこで会ったかを思い出そうとしていた。そのときだった。

「思い出したよ！アラン！昼間道でぶつかった人たちだ！」

そうデューイは言う。

そうか！あの2人だ！

アランもああと納得。

その納得している間にデューイはチャノとバーニーの方へかけていく。そしてこうだ。

「昼間の人でしょ！また会いましたね！」

とフレンドリーに接す。

相手はというと・・・

「ああ。こんばんわ。」

とチャノがにこりと笑いながら答えた。



「・・・あんたら何者だよ。」

アランは銃を右手に握って少し構えた。デューイも急いで構える。

「うゝん。難しいな。その質問。あ。でも・・・」

そうチャノが言いかけたとたんに、バーニーが倒れていた奴の持っていたかばんを取り上げて走り始めた。

「泥棒って言ったらわかりやすいかも！」

チャノも走り出す。

「あつ！まて！」

アランも少し遅れてだが走り出す。

チャノ達が一番近い位置に立っていたデューイはアランよりも先を走っていた。

「アラン！なんで銃使わないの？」

「アホっ！細い路地つてもこんな街中で発砲してみろ！警察来るだろ！」

フェリチターレは国に認められた機関ではない。だから銃刀を持ち歩いたらもちろん捕まる。

「アランっ！次の角右に曲がって、そのまま大通りに出て！」

前に走っていたデューイが指示した。どうやら挟み撃ちするらしい。

「分かった。」

それだけ答えるとアランは次の角を右に曲がった。

\*

東京 ファミレスにて

「2年位前かな？ある珍しい宝石が見つかったんだ。見た目は普通の青い宝石なんだけど、かなりの値段がついてね。それまであまり興味なかったんだけど依頼されちゃったし。てこと。これが理由だよ。」

「なるほどねえー。大体そんな事だろうとは思ったがよ。」

「嘘つけだよ。さっきまできょとんとしてたくせに。」

「うるせえ。」

紺はまた一口ケーキを口にする

「今回はロンドン支部長のお出ましかあゝ恐いなあ。」

ふふつと笑いながら麻は言った。

「大丈夫。多分アイツサボってるよ。今回はこっちからド素人のコンビ派遣したから、今頃そいつらこき使ってるって。」

そう言いながら紺は窓の方を横目で見る。

「そんな事言っつて兄さんさ。そのコンビ結構自信持っているんですよ？」

得意のニコニコ顔でそう聞く麻。

図星。

ほとんど凶星と言わん顔をしたのが自分でも分かった。

「ふふっ凶星。だね。」

クスクスと笑う麻を見て本当にスキを見せられない奴だなと改めて感じる。

「ああ。そう。自信あるぜ。結構。」

ニツと笑いながら紺はそう答える。  
続けて、

「そっちはどーよ。麻。」

「あるよ。今回は失敗したくないし。こちらは若いけどかなりの名コンビだね。ケンカばかりだけど息が合うんだ。」

その話を聞いたとたんに、思わず紺は笑っていた。

「はっ。そいつはいいな。こっちや埋め合わせの新米コンビだぜ。」

昔、一度だけその二人に任務お願いしたけどよ。ぐだくだでさ。お互い変に意地張って子供だよ。だけど最後はかなりビシッと決めるんだよなあ。結構息合うんだよ。最後は。」

「それ、遠まわしに俺たちが勝つ宣言してるよね。」

「あら？そんな感じに聞こえた？」

にたりと笑いながらそう聞く紺。

「うん。ホントイヤミな人だよ。兄さんって。」

にこりとかえした麻のその笑顔には自信の顔があった。

\*  
「バーニー。ここ。曲がって！」  
後ろの方を走っていたチャノから指示があった。

曲がれと指示のあった方は少し暗い裏路地だった。

「んで曲がったんだよ！大通り出たらよかったじゃねえか！」  
バーニーがそう聞いた。確かに、大通りなら人も少しはいるだろうし、紛れやすいはずだった。

「ここからの方が大通りに近いからに決まってるからだよ！」  
後ろを確認しながらチャノはそう答える。

「後ろは!？」

「来てる。」

そう答えるとまた黙々と走り出した。

「やばい！追いつかれそうだよ！」  
後ろからチャノはそう言った。

「んなことしってるわ！」  
バーニーがそう答えたとき、手前に角が見えた。見覚えのある。それを見てハツとしたバーニーはチャノにこういった。

「この角！右に曲がるぞ！」

\*

バーニーとチャノを追ってきたデューイは2人が角を曲がり大通りに出る道に向かっているのを見た。

いいぞ。そのまま・・・そのまま大通りに出たらこっちのモンだ。

きっと大通りにはアランが待ち伏せているだろう。

デューイも2人に続いて角を曲がった。

が。

「・・・へっ・・・？」

息を上げながらあっけにとられるデューイ。

そこには誰もいない、さみしく暗い路地の姿があった。

愉快な4人のduetto - 前章 - (後書き)

急いでいたのでたくさんおかしいところがあると思います。  
何かあったらお手数ですが連絡してください。

\*

やあ。こんにちは。今日はとつても、とつてもとつてもいい天気だと思わないかい？え？画面ごしで分からない？残念だ。いや、君は損をしているよ。人生の中でも5つの損の部類に入るくらい君は損をしている。しかし、君が損をしている分俺が得をするんだ。なんていいはなしだろうね。…そう？まあ君がそうならそれでも良いけど…いやいや。黙れ…待ってよ。まだナレーション終わってないだろ。…っおい！桐谷このやる！

スイマセンね。色々と霧真がぬかしてて…まあ気にしないでください。アイツの戯れ言は。ウザイだけなんです。これから話すのは、俺達6人が昨日体験した一つの追いかけてこの話です。すごく楽しかったです。特にあれ。紀っちがなんかわかんないけど参加してるところ。普通のサラリーマンなんですよ？なんでるのさ君。はっ！…もしかして俺になんか隠して実は裏社会の人でしたとか言うんじよ(殴)

裏社会の人じゃねえ！便利や…じゃなくて…普通にサラリーマンだ。サラリーマン。後無理に紀っちとか言うな。無理ありすぎるし、気持ち悪い。櫻井だ櫻井。…そのまま、本題に入っても大丈夫か？…ああ。わかった。…そのだな。俺達は一つの宝石のおかげで、一日を追いかけてここに費やすこととなった。…う…条…一条！

えっ！ああ…ごめんよ！はたして、俺達のいつも通りの一日を変えたこの追いかけてこの結末とは！俺達のいつも通りは返ってくるのか！？そして、ロンドン編との一つの繋がりが少しづつかいまみえ

てくる！…これで…いいですかね？桐谷さん。

俺に聞かないで！？櫻井に聞いて！

…いいですか？櫻井さん？

いや…いきなり呼び止められたから…今俺が何してるのか、今して  
る事が何に役立つかすら俺はわからん。だから俺を連れてきた張本  
人に聞いてくれ。

…いいですか？…霧真？

なんで俺だけさん付けしないの？

霧真にさん付けしてもねー…さん付けの価値がないと思います。

正解だな。一条。俺もそれに一票。

ちよつ…！櫻井？なにいつてんの櫻井さん？

いつちーnice！俺も一票！

桐谷い！桐谷このやろつ！お前ら絶対呪ってやるからなあああ…！！

霧真の探偵事務所にて。

\*

「あ。もしもしー。俺俺。霧真。」

『：お前にケー番教えたっけ？』

「桐谷から買ったんだ情報屋って便利だよな。」『なるほどな。：なんだよ。今俺、少し忙しい。』

「君達が今ロンドンで巻き込まれてる事件についての内容が聞きたい。教えてくれないか？」

『それも桐谷に聞けよ。アイツならボス経由で内容を事細かに知ってるはずだぜ？』

「いやいや。君から聞きたいんだ。桐谷じゃなくてね。」

『気持ち悪いいな：良いぜ。フェリチャーレの2人組が追っかけてくるまでならな。』

はあ。ため息をつく音が携帯を通じて聞こえた。

『どうやら、ロンドンでおきてる事件の中心、俺達が今取り合ってるものはわかってるらしいな。まあ、お前が聞きたいのは多分、ど

んな石かってことだろ。」

「大当たり。なんだ。今日バーニーさえてるじゃないの。もしかするとホントはいつも冴えてるけれども、お隣の韓国人が相当頭のキル奴だから目立たないって感じなのかな？」

「ウザイ。早く要件済ますからな。国際電話金かかるんだよ。「深青龍眼」つつたか？まあ通称「青い宝石」な。中国とかそこら辺で取れたすごく珍しい宝石でな。この世に2つはないって言われてる。だから、どっかの豪邸かなんかがうちに依頼してきた。昨日の真夜中にな。迷惑な話だろ。そしたらフェリチャーレがどこかでかぎつけてきて今の始末よ。」

「さて。おかしくないか？事件が始まったのは確か一週間前だ。依頼してきたのは昨日？それは確かか？」

「前までは現地のこそ泥さんが事件を起こしてた。それが、パタリとこそ泥が消えてな。ああ。そこは深く追求すんなよ。俺も理由は知らん。まあ、上手いタイミングで入れ違って事件は続けるように見えるわけ。ホントは別々の事件なんだが。」

「警察がそれに気づいてないってことは、手口を似せてるってことか。ホント、巧いよな人に泥被せんの。」

「失礼なことというな。もう全部話したから切るぞ。二度と電話すんな。」

ピッ。

一方的に電話は切られた。

携帯電話を手の中でぎゅっと握った。ビンゴだ。大正解だよ。大当たり。わざわざ桐谷からバーニーの携帯番号買ったかいがあった。

なぜ桐谷に直接「宝石」についての情報を買わなかったか。理由は簡単だった。マズいから。聞いたら桐谷を巻き込むことができない。これほど面白くないことはないだろう？情報屋と便利屋が混乱に参加する事によってヒートアップするってのにね。ああ。少し、混乱させてみようかな？っていうかそれ依頼だしね。全く困るよ。探偵の仕事完全に分かってないよね。そういうのはなんでも屋。まあ、便利屋に頼むべき。あ。でもあの便利屋変なところでバカ正直で妙に真っ直ぐで妙に曲がった奴だからな。どっぷりこっち側の世界に浸かっているくせに、こっち側の世界は嫌いなんだ抜かす意味の分らない奴。真っ直ぐなのか曲がってるのかハッキリしてほしいよ。こっちが困る。あ。話ズレたね。いやまいったよ。まさか、こんなに素晴らしい仕事あるなんてね。ごめんよ。さっきと矛盾するようだけど、俺は今困ってない。むしろうれしいね。人を混乱に巻き込んでなんて依頼初めて聞いたよ！最高だ！最高だ！最高だ！最高だ！最高だ！最高だ！あー。何度言ってもいいけれどこれで終わっておくとしよう。

頭の中でめまぐるしくいろんなことを考える霧真。

「きゃはははは！」

思わず霧真の口から笑いがこぼれ落ちる。

そして両手をあげてこう言うんだ。

「It's a show time!だ！今回はどれだけの人の日常を奪う事ができるだろうか！楽しみにしていてくれ諸君！」

部屋の中に響く霧真の声は嬉しそうで楽しそうまるで人の不幸を

楽しく笑うような、しかしどこか寂しそうな声だった。  
その声が段々小さくなっていきそして口がこつ動く。

「じゃあ、まずはさ。一ノ瀬兄弟から巻き込んでみようかな。」  
にたつと口元が笑う。そして手に強く握られていた携帯から一ノ瀬  
紺の電話番号を引き出した。

さあ。

I t , s a s h o w t i m e !

\*  
「なんだあ。アラン達いないのか。」  
はあとため息をつき口を尖らせて所長室の前の廊下のドアから顔を  
出しているのは一風変わった青年だった。髪の毛は白に近い銀髪で、  
パーカーを羽織り、黒いスキニーをはいていて手には大きな旅行用  
の茶色カバンを持っていた。

「そんなとこに突っ立ってないで、中に入ったらいいじゃねえか。桐谷。」

所長室からも彼の姿は丸見えで、格好から桐谷だと一ノ瀬はすぐに判断することができた。

「おー！一ノ瀬！なんだ？ 仕事なか？」

明るくハイテンションな桐谷の声が所長室に響く。

「しかしまあ。寂しいな。静かすぎないか？」

不思議そうに桐谷はキョロキョロとあたりを見回す。続けて

「ああ。確かみんな外に出ていて本部はお前一人だっけか？」

思い出したように桐谷はそう言った。

「そ。俺一人。コーヒーでも飲むか？」

「あ、じゃあちようどよかったね。ミスドで一ノ瀬達に分買ってきたよ。」

そういつてミスドの袋を客用の机の上に置く。

「お。ありがてえ。さすが。情報屋様々だな。」

桐谷の仕事は情報屋。巷でもかなりの評判で、結構もうかってる。情報所有量は膨大で確かな信頼も得ている。

「いや。今回は情報で稼いだお金でドーナツを買ったワケじゃないんだなあ。実は、今日大道芸で500円くらい稼いでよ！」

ふふんと自慢げに笑う桐谷。

「おいウソだろ！ 最高記録じゃねえか！ 今まで寄付程度で10円玉しかもらえなかったくせに！ 1円玉邪魔だな。そうだ。そばにある募金箱に入れちゃえみたいなのりでみんな入れていくのに！」

「そこまで言わなくても！ いや、俺の努力を神様が見てくれてたって事だな！」

「さあ。偶然物好きが集まってただけだと思っぜ。」

そっぴいながら、できたてのコーヒーをテーブルに運ぶ一ノ瀬。

マグカップはごとんと音を立ててテーブルに置かれた。それと同時に桐谷はさっきのミスドの紙袋からドーナツを2つ取り出した。

「一ノ瀬さ。いい加減認めようよ。俺の努力。」

はあ。とため息をつき、桐谷はドーナツに手を伸ばそうとした。

「努力つて…お前元々運動神経が人間離れしてるから努力もクソも…ちよつとまで。」

ドーナツに手を伸ばしかけた桐谷の手をガシツとつかんだ。

「?なに?」

キョトンとした桐谷の顔を見ながら一ノ瀬はこう続ける。

「…お前のそれ…。エンゼルじゃねえか。」

ドーナツに指を指して一ノ瀬は大真面目にそう言った。

「…あ。ドーナツ。そうそう。おいしいそうだから買ったの。」  
にっつと笑う桐谷。

「…なんで俺のはポン・デ・リングなんだよ。」

「あれ?一ノ瀬ポン・デ・リング嫌い?新作だったから買ってきたの。」

「俺はポン・デ・リングよりもエンゼル派だ。交代しろよ。」

「え!嫌だよ!俺これ楽しみにしてたのに!」

「うるせえ!じゃあなんでエンゼル2個買ってこなかったの!俺食べたい!それ!」

「なにそれわがまま!?イヤだよ。買ってこればいいじゃん。俺は分けないぞ。大体それ一番高いやつ!」

「じゃあせめて全部ポン・デ・リングにして来いよ!」

「だから一番高いやつだからそんなに金ないって!」

ギヤアギヤアと所長室は騒がしくなる。にぎやかで、お互い笑いあっている…ふと、桐谷は高校時代を思い出す。

一ノ瀬と俺、桐谷霜は中学、高校とも同級生だった。ただ、中学のときから仲がよかったと言うわけでもなく、その時は目があっても顔色一つ変えない。そんな感じ。仲良くなったのは高校からだった。クラスの中でも比較的社交的で明るかった俺からクラスで一人孤立

している一ノ瀬に話しかけたのが始まり。高校の時からすでに変わり者扱いされていた一ノ瀬だが、俺からみてもかなりの変人だ。もちろん今でも。しかし別に一ノ瀬が変人だろうがちゃらんぽらんだろうが俺は気にしなかった。別に俺が楽しければそれでいい。俺が良けりやそれでいいんだ。なんとというか、自己満足な考え方なんだろう。でも、俺はその考え方を結構尊重しているから嫌な気にもならないし、直そうともおもわない。まあ、とにかく一ノ瀬と俺との出会いはこんな感じだった。後々、一ノ瀬に惹かれてか変人ばかり集まり今に至っている。類は友を呼ぶってね。俺もそれに入っているのか？いや、あの中で俺は一番まともだと思っけどなあ…

そんなことを考え出していた桐谷だがそれらはすぐにかき消される事になる。

P L L L L L L ! !

携帯の着信音が室内に響く。

一ノ瀬の携帯だった。

「わりい。ちょっと出てもいいか？」

ポケットから自分の携帯電話を取り出す一ノ瀬。「どうぞ。」

「もしもし。」

携帯電話から聞こえたのは、聞き慣れた友人の声。

この電話から一ノ瀬たちも霧真の迷惑に付き合わされることになる。

ゆっくりと…ゆっくりと。

\*

東京 オフィス街 某所

「あーいらっしやい！」

特徴的な黄色のワゴン車から若い爽やかな声が聞こえてきた。中にいた男はどこかオシャレなカフェを思わせる紺色無地バンダナを頭に巻き、同じ色の無地の腰に巻く用のエプロンを着て、白シャツに紺色のネクタイ。黒いズボンを身につけていた。

「あ、メロンパン一つくんない！」

ワゴン車の中でメロンパンを売っていた一条に客はそう注文してき  
た。

「はいよ。何味がいいですか?」

「何味って…何味があるんですかあ〜!」

客は若く、そこから辺でたむろする不良達だ。

「うーん…チョコとがありますよ。」

「じゃそれで。」

しれっとした顔で注文する不良。

「はいよ。じゃあ、160円ね。」

にこりと営業スマイルで答える一条。

「はい。」

ちゃりんと音を立てて小銭がカウンターに落ちる。

そのまま彼らはワゴン車を離れて10m先でたむろし始めた。それ  
まではよかった。

それまでは。

「…っていうか、メロンパン俺あんまり好きじゃねえし。」「じゃあ  
あ買っつなよ。」「みんな買ってるから空気読んで。」「  
そんな声がメロンパンを買った五分あとに聞こえた。  
そしてその後の行動で彼らはしばらく意識を絶つことになる。

「あー。次行こうぜ。」「そういいながら彼らのうちの一人がメロン  
パンを包んでいた紙袋をポイ捨てる。

ガンツ!!

彼らの後方から何か鉄と何かがぶつかるような音が聞こえてきた。

「あ？」

振り返る不良達。

そこには先ほどのメロンパン屋が木刀を二本両手に持ちながら、不良達からみて左側に目を向けて呆然と立っていた。

「なんすか？あ、もしかしてメロンパンの悪口で起こったりして？」  
不良達の一人はケラケラと笑いながら一条に話す。

「お、木刀？何ケンカ？俺たちと？お兄さん俺たちなめてね？」

「こっちは鉄パイプだし！」

「木刀とか楽勝っしょ〜」

そんな声がチラチラと。しかし一人がビクビクしながら仲間へ忠告する。

「お…おい。止めとけよ。ほんとに。いや、リアルに。知らないのかよ。戦うメロンパン売りの伝説…」

「何ビクツてんの！あんなひよるそうな坊ちゃんみたいなのがなわけないじゃ…」

ポカン！

忠告した不良の前に立って話していた仲間が鈍い音と共に倒れる。

そして目の前にはあのメロンパン売りが立っていた。さっきまで確かにワゴン車の前にいたのに！

「…ひっ！」

声が出ない少年。

「君達今さあ、メロンパンの悪口言ってたよね？いや、そこまでは我慢できたのよ。ホントに。たださあ、ポイ捨てはどうかと思うよ？君達が少し歩いて向こうのゴミ箱に紙袋を捨ててくれれば今日は机一個と椅子二脚壊せば気が済んだのにね。ああ。もう俺責任取らない。知らないよ俺？」

いきなり主語が僕から俺に変わった一条を恐る恐る見る先ほどの少年。そして、一人の仲間がいきなりメロンパン売りに向かって鉄パイプを振りかざす。

ガンッ！

鉄と鉄が激しくぶつかり合う音。一瞬で少年の攻撃を受けたメロンパン売りの手にはいつの間にか木刀ではなく鉄パイプが片手に握られていた。

「なっ！」

驚く少年。

「だから、要は…」

ギリッと歯を食いしぼる一条。次の瞬間。

「ゴミはちゃんとゴミ箱に捨てろおおおおお！」

大声を張り上げた一条はそのまま少年を鉄パイプで振り払う。少年は吹き飛ばされた。



\*  
東京 オフィス街 某広場にて

今日も空は澄んでいた。昨日も一昨日も、空は澄んでいた。だが明日はどうなるかわからない。俺は気象予報士じゃないんでな。風も涼しく吹いて、もう夏が終わりそう。そんな風だ。気持ちいい。俺は夏よりも冬が好きだ。ああ、すまん。そんな事どうだっていいよな。

今日この広場にきたのは仕事の帰りにちよつと会いたい人がいてな。仕事は簡単に依頼されたものを今日の午後5時までにある場所に届けるって内容だった。いつも仕事はこんなのはっかでもう便利屋じゃなくて運び屋みたくなっている。いや別に俺は運び屋も好きだからいいけれど…どっかの万事屋みたく楽しい仕事もしたいんだがな。まあ、俺のまわりがまわりだし。ある意味的には楽しいかな。今の状態も。

しかし…

今日はいないのか？

メロンパン屋は？やけに静か過ぎないか？帰ったか？…少し一条と話がしたかったんだが…

帰るかな。一条いないなら広場にもする事がないし。

ふう。つとため息をつき、便利屋と名乗る男は口にくわえてた食べ終えた棒付き

キャンデーの棒を広場に捨てる。

刹那。

「ゴミはゴミ箱に捨てるおおおおお！！」

怒鳴り声が少し離れた広場の近くの歩道から聞こえてきた。

あーあ。

一条キレた。

相手がケンカを売ったのかそれとも相手の行動、発言が気に入らなかつたかその両方か。ともあれ、一条がキレた時点でワゴン車の前には人が倒れてるだろう。容易に便利屋には想像できた。

やばいな。俺もポイ捨てしたし。

ハッと気づいた便利屋は数歩後ろに下がり棒付きキャンデーの棒を拾い、ポケットにしまう。

さて、一条も見つかったし。俺の話聞いてもらおうかな。

便利屋は広場の外にでた。

\*

東京　　オフィス街　　某広場近く歩道　　ワゴンメロンパン屋にて

あー。なんか、またお客さん少なくなるなあ……。前回広場ですごく  
暴れちゃったから今日は広場から少し離れたこの歩道で店開いたの  
に……ここ無理ならどこに開いたらいいんだろう？

はあ。ため息をつきながら今巷でも有名な一条　慎はワゴン車の前  
に数個ほどのテーブルと椅子が並べられているそのうちのワゴン車  
から一番近い椅子に腰掛けてテーブルに肘をついて、先ほどの暴れ  
っぷりに後悔していた。

いや、我慢することはできるよ。できるんだけど、彼らの将来を考  
えるとやっぱりあの時の行動は正解だと思う。これで彼らはпой捨

てをしないだろうけど…

グルグルとめまぐるしく先ほどの不良達を成敗したシーンを思い出す。そして自分が間違っていないことを言い聞かす。自分に。そして、気づいた。一つの問題に。

へこましたポスト…どうしよう!?

ワゴン車の隣にあったポストに気がついた。自分が彼らを驚かすつもりでへこましたあのポスト。

どうしよう!?!ポストってスゴい高いって聞いたことがあるよ!俺の貯金で足りるかな?ああ、どうしよう…まいったな…

ポストの事を考え始めた一条は頭を抱え、テーブルに突っ伏した。

「よっ、一条。…元気ねえな。」

聞き慣れた声が聞こえる。一条の隣にはあの便利屋が立っていた。

「…櫻井…さん?」

突っ伏したまま一条は櫻井と呼ばれた便利屋に疑問形で投げかける。

「疑問形かよ。おつかれさんだな。」

櫻井の”おつかれさん”が仕事に対してのおつかれさんではなく先ほどの暴れっぶりへのおつかれさんだとは一条もすぐに悟った。

「別に暴れたから元気がないわけではないんです。ただ…ただ…ポスト…」

少し顔を上げて泣きそうになる一条。

「…ポストお？」

「そうです…ポストです…少し…へこましちやつて…」

「…だから？」

「弁償金です！俺の貯金で足りるかで悩んでるんですよ！」

「えーっと…ちょっと待って。ググってみるから。」

スマートフォンをポケットから取り出して櫻井はインターネットを開き始めた。

「…なにかありましたか？」

櫻井に問う一条。

「ああ、そうだ。ちょっと話したくつてな。」

「そうですか…なんですか？聞きながら一条はテーブルを離れてワゴン車に向かう。」

「あ…？ああ。実は、今日の仕事のことです…スマートフォンを見つめながら櫻井はいう。」

「仕事…ですか？」

ワゴン車内から顔を出してそう返す一条。

「そう仕事。なんかさ、今日は届け物の仕事だったわけよ。」

ボタンと音がしたと思うと、一条がワゴン車から出てきて手には缶に入ったお茶2本を持っていた。それを櫻井の前に差し出しながら一条は言う。

「届け物ね。お疲れ様です。」

「そう、届け物…あつ、一条。ポストは16万円するらしい。」

「あ、頑張れば返せますね…がんばります。」

「…別に引きずることあねえと思うが…あんぐらい

したほうが今のガキにや効くと思うぜ。」

「……効いてくれたならうれしいです。よかったです。あ、届け物。」

「そうだそうだ。届け物。……それで、その届け物を頼んだ依頼人が妙でな。」

「妙ですか……いやでも、櫻井さんの職業ならたくさん妙な人来るでしょう?」

「いや、そうだけど……なんか、今回ののは特に……みたいな?」

「みたいなのって……疑問で返されても知りませんよ。俺、そこにいなかっただんですし……」

「まあ、気になったんだよ。依頼人が。」

「で?」

「一番気になったのは、届け場所が霧真の探偵事務所だったこと。」

「……怪しいですね。霧真。」

「ああ、また変な性分に巻き込まれそうだな。とっとと逃げた方が得策か?」

「逃がさないでしょう? 霧真なら。大体、そういうのは日常茶飯事なんで。気になりませんねえ。」

「お前は構わねえだろうが、俺は嫌だ。面倒くせえ。」

「先ほど一条に手渡された缶のお茶をすすり飲む。」

「出ました。お得意の面倒くさ

い。櫻井さんはなんでもかんでも面倒くさがらないで下さい。」

「はあつとため息をつき、一条はさつと携帯を取り出した。」

「?んだ。いきなり携帯なんか取り出して。」

「少しメールをと思ひまして……霧真警報発令です。一ノ瀬さんと桐谷さんにはも

ちろん、アラン君達にも……多分海外にいると思うけど、送ります。」

あとバーニー  
とチャノにも。」

送信っ！と携帯を持った右手を空に掲げて一条は言う。

「…親切なこった。」

ふう。とため息をつき、間をあけて櫻井は続けてこういった。

「じゃあ、俺帰るわ。ありがとな。話聞いてくれて。」

ガタツと音を立てながら椅子から立ち上がる櫻井。

「いえいえ。」

そう言いながら一条は手を振る。

気をつけて下さいね。

霧真は絶対に櫻井さんを巻き込むはずですから。怪我なんてされたら、心配ですし。

口に出そうかと思った一条だが、言わなかった。

思えば、

櫻井さんが怪我する訳ないかあ…

\*

霧真 京 様

こんにちは。私、「瀬戸」と申しまして…  
今回あなたに手紙を出した理由…というのも、依頼なんですけどねえ。

あなたは、最近ロンドンで起こっている「連続宝石窃盗事件」について。ご存知ですかね？

まあ、知ってはいると思います。

なんせ、今あなたのご友人がその渦中にいるのですし…

ああ、失礼。

少し話がズレましたね。

依頼の件に戻りましょうか。

依頼内容はあなたなら簡単な事だと思います。

一ノ瀬兄弟の目をロンドンの連続宝石窃盗事件からそらしてほしい。  
報酬は依頼内容の出来次第です。

ね。

簡単なことでしょうか？

それでは。

\*

東京 オフィス街

一条と話しおえた櫻井はひとりオフィス街の夜道を歩いていた。夜道といってもここは東京のど真ん中。明かりは消えるはずもなく、いつも通り真っ黒い夜空には星もみえず、明るくビルの明かりと街灯がにぎやかな街道を明るく照らす。オフィス街ということもあり歩いているのはスーツを着ている人ばかりだ。櫻井はグレーのカーディガンを羽織り街を歩いていた。わずかに。私服を着た人を見かける。観光客か何かか？不思議に思う櫻井。しかし、あまり気にしてはいなかった。駅前はずっと、混んでんだらうな。今の時間、駅

には家に帰る人でいっぱいだと予測した櫻井。まあ、別に俺は此処に住んでる訳だし。関係ねえがな。そう付け足す。

ガリッ

棒付きのキャンディを噛み砕く。

チュッパチャプス…あと何個残ってたっけな…

そう思い、一人考える。ふと後ろから、

「櫻井ー？」

聞き慣れた声が自分を呼ぶ。振り向いた先には、予想通り。スーツだらけのオフィス街では目立つ白に近い銀髪、そしてまたまたオフィス街では目立つパーカーにスキニーといった格好。情報屋 桐谷霜がこちらに手を振っていた。

「よお。どした？」

ペリペリとチュッパチャプスを包んだビニールをはがしながら桐谷にそうきく。

「仕事の帰り。櫻井は？」

桐谷は聞く。

「俺もそんなとこ。」

ペリペリ…未だにはがれないキャンディのビニール。

「櫻井さあ。チュッパチャプス依存症じゃないの？食べ過ぎだよ。」  
「るせえ。櫻井はそうかえす。」

ペリペリ…

まだはがれない。

「霧真…。また迷惑起こそうとしてるけど…。もう勘弁だよ。今

日電話きた。あ、一ノ瀬にだけどね。」

「あ？霧真がか？」

思わずキャンディのビニールをはがすのを止めた。

「うん。ロンドンがどうたら。」

「…ロンドン？」

「知らない？今アラン達ロンドンで争奪戦してんの。」

「相手は？」

「バーニーとチャノ。」

「…しばらく帰ってこねえんじゃねえか？それ。」

「そいやさ。あの二組まだ面識ないよねえ？」

「確かに。」

「で、そのアラン達が争奪戦しているものがなんともまあベタな…」

桐谷の話の途中。櫻井は異変に気付く。

だんだんと。

このスーツばかりのオフィス街には似合わない、私服の集団が自分達を囲むようにして集まってくることに。

桐谷も気づいたようで眉をひそめる。

「いたいたあ。あれじゃねえの？」「写真の通りの格好してんのな。」

「お？便利屋と一緒に情報屋もいるじゃねえか。二石一鳥？」

おい！バカがいるぞ！二石一鳥だってよ！一石二鳥だっつうの！」

「先にこいつからしばかねえか？」

桐谷達を取り囲む私服の集団は口々にそういう。彼らの顔は深くか

ぶつた帽子に隠れている。

「あれえ…？俺、恨まれるようなことしたかなあ？」  
と、苦笑いの桐谷。

「情報売り買いしてる自体で恨まれるようなことしてるだろ。」  
はあつと溜め息混じりにそう言う櫻井。

「なあ。便利屋さんよお。あんた、あの宝石どこやった？」  
いきなり、鉄パイプを片手にした私服の集団の一人が櫻井にそう問  
い始める。

「…はあ？」  
意味の分からなさうに櫻井は顔をゆがませる。

「とぼけんなつて。あんた、なんかすごい宝石持ってんだろ？それ  
渡せつて。」

先ほどとは別の奴が櫻井に言う。

「…宝石…？…つまさか！？」  
心あたりのありそうに目を見開く桐谷はいきなり櫻井の襟首の後ろ  
の方をガシツとつかんで猛ダツシュでその集団の輪の中から逃げ出  
す。

「痛い痛い痛い！！ちよつ…！！？桐谷！？マジで痛いから！！苦し  
いから！！桐谷くん！！！」  
襟首を勢いよくつかまれた櫻井はそう言う。

「じゃあ放すからマジダツシュで逃げろよ！！櫻井！！！」

そう言つて櫻井の襟首から手を放す桐谷。  
放した瞬間、櫻井はバランスが取れず転びかけた。後ろから私服の集団が追いかけてくるのがわかった。櫻井と桐谷は夜の明るいオフイス街を駆けめぐる。何事だと驚く人もいれば関係ないと無関心の人もいる。そんなスーツの人達をかき分けながら2人はダッシュで逃げる。

「んだよ!!あれっ!?!」

逃げながら櫻井は桐谷に問う。

「知らないよ!とにかく逃げて!」

「知らないのに逃げるのかよ!」

「だつて櫻井あいつらが何のことはなしてるか全然わかつてないし!あつちからしたらただとぼけてるとしかみえないし!そうとわかつたらどうみても襲いかかってくるでしょ!あんな街のド真ん中で騒ぎ起こしたら面倒くさいじゃん!」

「確かに。つていうか…なんか…人数…」

「なに?人数が減つた?そうだよね?そうだつていつて!!お願いだから!!」

「悪い。無理だ。完全に増えてる。」

「マジでか!?!…っああっ!!もう!!」

決心したのかやけになつたのか、桐谷は大通りに真っ直ぐ走るのを止めて櫻井のカーデイガンの腕をいきなり引つ張り急カーブで右の通りに曲がつた。桐谷が急に曲がつた道の先には一時間ほど前、櫻井が一条と話したあの広場がある。

「うおっ!?!」

真っ直ぐに走る気満々だつた櫻井はいきなり桐谷に右腕を引つ張られまたまた体勢を崩しかける。

「んだよ!桐谷!そこあ広場だぞ!大通りに出てくのが得策だろうが!」

体制を立て直した櫻井は桐谷にそう言う。

「櫻井くんさっすがあー。大通りに出て巻く作戦バレちゃったね。でもさ、櫻井。もう少しよく考えてみて。あの私服の集団、少し分散して先回りしてた。つまりあっちにいったらはさまれて厄介なことになるよ。」

「よく見てんのな。」

後ろからは相変わらず集団が追いかけてくる。

目の前には広場が見えてくる。夜だからなのか、ま人が見当たらない。そして読みとる。櫻井はこの後の桐谷の行動を。

「桐谷い…てめえ…まさか…」

少し引きつった顔の櫻井。

「あ。気づいたくさっすが櫻井くん」

ご機嫌の桐谷をみたたん、櫻井のいやな予感の的中する事になる。

噴水の前まできて、2人は足を止める。それをみた集団も5メートル先で立ち止まる。

「なんだあ。あきらめたか?」「へへっ。やっちゃっっ?やっちゃっっの?」「ばか。依頼の品とってからだよ。」

集団からはそういう声が聞こえてきた。そして1人が前に出てくる。

鉄パイプを  
持って。

「だから。はやく渡せばこんな事にならなかったのによお。」

「だから、知らねえって言うてんだろ。そんなもん。」

はあっとため息をつき困る櫻井。

「ははっ。とぼけてるって言うんだよな？こっこの。」「お。珍  
しくこいつが当てたぜ。」「嵐でもくるんじゃないかねえの？」

「もう一度だけチャンスをやるぜ。宝石はどこだ？」  
完全にこっちをしばくつもりの男。

そして。櫻井の返事は。

「だから。知らねえよ。そんなの。何回も言わせるな。」

ガリッ。

櫻井は口の中でチュッパチャプスを粉碎する。

「上等だ！」

鉄パイプを大きく振り上げ男は櫻井に向かって殴りかかる。

刹那。

男の数メートル上に人の気配を感じる。気づくやつはとっくに気づいてた。

男の上に、さっきまで隣にいたはずの銀髪パーカー男が日本刀を持って勢いよく切りかかってきた。

「…なっ！」

男は一瞬何があったかわからなかった。

「上等で結構。あ。今の峰打ちってやつだから死なないと思うから安心して。」

いつもの桐谷の笑い方はこの状況下不気味に見えた。

鉄パイプの男はそのまま倒れる。周りの奴らは少し後ざすりする。

桐谷の着地と共に櫻井は平然と口を開く。

「おいおい。俺、別にかわすくらいできたのによお。」

「…うそつきなさいよ。チュッパチャプス噛んで粉碎したじゃない。完全にイラついてたじゃん。櫻井くん、イラついたら俺の日本刀峰打ちよりひどい事しそうじゃん。だから俺がでてきたんだよ。」  
引きつった笑顔を見せる桐谷。

「…まあ、確かにそうだけど…。なあ、てめえのその日本刀貸せ。」  
櫻井が指さすのは桐谷の手に握られた日本刀。

「これ？はい。」

それを櫻井に渡す桐谷。

ふわっ

風が吹く。優しく、緩やかな風だが、生暖かく、この場にいる人にどこか緊張感を与える。

この緊張感に耐えられなくなったのか、一人、また一人と桐谷、櫻井に向かってくる。

「紀つち。峰打ちでよろしく。刃の方は使わないでね。」

「了解。」

そう言い、桐谷は櫻井と背中合わせになるように立つ。

カンッ！

鉄と鉄とがぶつかり合う高い音が桐谷の背後から聞こえた。そのうちに、桐谷の後ろにいた櫻井は鉄パイプを自分に振り上げてきた奴を蹴り飛ばす。そしてリズムよく刀を振り回し、また高くジャンプしたり、相手を蹴り飛ばしたり…。一気に何人もの奴が地面に音を立って倒れる。

一方桐谷の方はというと。

一気に何人もの奴らが桐谷に向かってくる。

「ははっ。もしかして、日本刀櫻井に渡したから素手だと勘違いされてる？」

一気に走ってくる輩にも桐谷は余裕の笑顔。

「でも残念。実は俺、日本刀よりも……」

言いながら桐谷はパーカーのポケットに手を隠させる。そしてポケットから出てきたのは。

「こつちのほうが得意なんだよね。」

…無数のナイフ。

桐谷は不気味な笑顔を見せながらそいつをまるで扇子を持つかのようにかまえ、それを一気に走りくる集団に投げつける。それは良いぐらいに彼らにあたる。

それでもまだ数人は残っている。桐谷はまたポケットに手を突っ込みナイフを取り出し、先ほどと同じ方法を使い倒していく。何人も何人も。倒していく2人だが、異様に数が減らない。

「どんだけいるんだよ!!」

櫻井が苛立ちながら呟く。

「知らないよ！なんか数が増えてるみたい!!」

桐谷は相手の攻撃を交わしながらそう言う。

そして、櫻井と桐谷は増えていく集団の間から見慣れた黒い中折れ

帽子を見る。

…やっぱり。予想は的中か？

その中折れ帽子をみて桐谷は少し歯を食いしばる。

ゆっくりと、中折れ帽子のしたから桐谷の予想していた顔がでてくる。

にたり。と笑うその中折れ帽子の男は多分この騒動の原因であろう  
探偵。霧真 京だった。

「…みつけた。」

桐谷は呟く。

「っ！？あのやろう…霧真っ！てめえ！！」

櫻井の怒声が聞こえる。

櫻井が自分の事に気づいたと分かるとう霧真はにたつとわらいながら  
ピースをし、その場をダッシュで立ち去る。

「なあっ…！？まーちーやーがーれえええ！！」

櫻井の怒声と共に、櫻井は自分の前に立っていた私服の集団をどか  
しながら霧真がそこを去って数秒後にダッシュで霧真の後を追いか  
ける。

「あっ！！待つてよ櫻井！！置いてかないで！？」

そう言いながら桐谷も櫻井の後を追いかける。

「ああ！？逃げんじゃねえ！！」

桐谷、櫻井の後ろからは私服の集団の残り者達が追っかけてくる。

この追いかけてはバズイスタの本部前まで続く事になる。

\*

東京 某オフィス街はずれのビル前にて

バズイスタの本部はフェリチターレの本部があるオフィス街の中心から少しはずれた場所にある。はずれたといっても、結構都会ではあるのだが。

時刻は9時くらいかそれを上回るくらいか。自分の仕事はまだ残っているし、ロンドンに行かせたバーニー達と連絡を取らないと…時差的にあっちは今何時なんだろう？

コンビニからの帰り、一ノ瀬 麻の頭の中はそんな感じた。

そっぴい、またでたつてね。あの都市伝説の…時雨？だっけ？時雨って名前、変わってるよなあ…自分も変な名前だけ。…妖刀かな？兄さんの奴みたい。

コンビニに行つて来たのはいいけど。今からやる仕事、面倒くさいなあ。霧真のやろう。あとではめ返してやろう。

ふうつとため息をつき、麻は空を見上げる。すると、綺麗に月がでていた。空は真っ暗で、とても良いコントラストだ。風も涼しいし。気持ちいい夜だよなあと思う。

さわさわ…

風の優しい音が聞こえる。これで平和が続けばいい。麻は願う。しかしその願いはあと5秒後に打ち砕かれる事になる。

たた…

風は、運んでくる。

たたたた…

優しく。ゆっくりと。

たたたたたたた…

迷惑を。

後ろが騒がしいと気づく。なんだと後ろを振り返ると、後ろからのオフィス街には似合わない、私服の集団がこちらに向かって走ってくる。

「…俺、どうするべき？」

少し歩道沿いに後さずりしながら麻は呟く。すると、後ろからは人の気配。それに気づく時には少し遅く、いきなり口をふさがれ後ろへ引っ張られる。

「こっつするべき…！」

2人分の声が後ろから聞こえた。綺麗にハモって。

え…!!?

なにこれ!?

なんで口ふさがれてんの!?!なんで引っ張られた!?!っていつか…

「なにしてんの?桐谷、櫻井?」

呆れ顔で振り向く麻。

そこには、見慣れた仕事仲間。情報屋と便利屋という異色コンビが自分の襟首の後ろをつかんで立っていた。

「あいやー。バレた」「ワザとらしくペろっと舌を出しながらウイ

ンクする桐谷

「ちよいといろいろあつてな。ここまで逃げてきた。」  
ふうつとため息混じりにくわえていた棒付きキャンディの棒をぺつと吐き出す。

しかし、それをした一秒後、はつとし吐き捨てたペロキャンの棒を素早く拾う。

「すつごく迷惑だよ。それ。」

麻が一言。

「まあまあ〜そんなこといわないでえ〜！」

ふふつと笑いながら桐谷がそう言う。

「おい。もういったか？」

と、さっきの集団を気にして周りを見渡す櫻井。

「いつてる。いつてる。…ちよ…ホントに襟首放して。コンビニア  
イス溶ける。」

と麻。

「俺におごるなら放す。」

しれつと櫻井。

「はあ？ちよ…ふざけないですよ。嫌だよ。」

「おごれ。」

完全に瞳孔が開く櫻井。

はあ…ため息をつき麻は続けて。

「ははつ。イラつかないですよ。ホント、櫻井は無茶なやつだよね。  
いや、面白いからいいけどさ。」

といつもの優しそうな紳士の笑顔で言う。

その後、3人はコンビニに行くことになる。

\*  
東京 オフィス街

ちょうど麻が桐谷達と出会うそのころ、麻の双子の兄ーノ瀬 紺は  
オフィス街の中心を転々としていた。

転々つて。遊んでねえぞ。ちゃんと仕事してるからな。

心の中で呟く。

今日の昼、この街で探偵をしている性悪でウザくて、イライラする  
へんなキャラの霧真 京から電話があった。その件について今調べ  
てる途中だ。

電話の内容が「ロンドン連続宝石窃盗事件」についてだった事が一  
ノ瀬は気になった。

なんせその事件の中心は自分達、フェリチターレとバズイスタであ  
るからだ。わざわざ人をロンドンによこしたってのに…

「宝石がこの街にあるたあどういうことだ？」

もちろん、俺だって霧真の言ったことを鵜呑みにするわけじゃねえぜ。7割疑っている。ただ、その7割がハズれたらシヤレにならないしなあ。今回盗られたら麻にでかいおしといて結果が結果じゃしばらくいじられそうだし…バズイスタも今以上に調子ついてきそうだし。

とにかく上げれば上げるほどでてる俺へのデメリット。組織はどうでもいいが俺、麻に先越されたくはないんだよなあ…と。

さり気なく組織はその次におく一ノ瀬。

ようし。もう一人くらい聞いてみるか。

そうやって少し暗めの路地に出る一ノ瀬。早速スーツでタバコを吹かす少し危なげの人に出会う。

「スイマセン。最近高価な石が出回ってるとか聞いたことナイっすか？」

「あ？高価な石？宝石的な何かか？耳にはさんだことならあるが…」  
ふうつとタバコを吹かす黒スーツ男。続けて

「せいなら、俺よりも駅前にうるちよろしてる情報屋の方が詳しいと思うぜ。」

駅前の情報屋…桐谷のことじゃなさそうだ。

そう分かれると一ノ瀬は黒スーツの男に礼をいい、駅前に向かう。

情報屋かあ…  
いくら金取られんだろうなあ…  
今千円しかねえけど。  
後払いOKか？  
なら助かるんだけどよお。

また考え出しながらあるく一ノ瀬。  
うーん。どうしよう？

しばらくして一ノ瀬が行った事を確信した男は携帯電話を取り出す。

「…もしもし。…ああ。見つけた。…っていうか逆に話しかけてくれたし。…ああ。聞いてきた聞いてきた。…ああ。そうなんじゃねえか？一応、駅前に向かうように言ったからよ。…おお。よろしく。」

パチンと音をたて携帯電話を閉じるスーツ男はそのままその場から立ち去った。

\*  
東京 オフィス街 広場

「…危なかった。」

はあつとため息をつきながら夜の寂しい広場近くを歩くのは黒い中折れハットに黒ベスト。黒いズボンに黒い靴…とブラウス以外黒の格好をした探偵。霧真だ。

「きつと、今度桐谷達にはったりでも会えば俺、みんなより先に逝くかもしれない…ぐすっ…ごめんよ！！読者のみんなアディオス！！」

相変わらずヘンなテンションでそう話す。

「…いや。リアルに死にたくはないなあ。どしよ。あいつらの相手はさすがにきついような。」

ぶつぶつと独り言を始める霧真。

「瀬戸」というやつからの依頼で始まったこの騒動。他の奴らは俺が起こした騒動だと思っているだろうけど。ただ、今回の依頼は変わったなあ…探偵がする仕事じゃないよね？

「瀬戸さんって誰なんだろうねえ…ほんと。知り合いかな？」

「ぶつちやけ。そんな人知らないなあ…一ノ瀬とか成瀬と

か。後ろに 瀬 がつくひとならいるけど。」

「極度の恥ずかしがり屋なのかな？」

「じゃあ彼。俺に会わずにいるつもりかなあ…。」

「かなしいなあ…一目見てみたかったんだけど…」

頭に浮かぶたくさん言葉の言葉を誰に向けることなく霧真は一人口に出す。

夜の十時くらいだが、霧真は沢山の人とすれ違う。リクルートスーツ姿の人がほとんどである。沢山の人とすれ違いながら都会の夜道を歩く霧真。

そのまま、自分の事務所に向かう。

事務所は一応オフィス街にあるのだが、その周りは静かで暗い。女の人は一人で歩いちゃいけないような道である。

そんな夜道を霧真は先ほど立ち寄ったコンビニの袋をゆうゆうと振り回しながら歩いている。

「  
」

全くこの最悪のトラブルメーカーは陽気である。

ふと、気配が気になった。

広場あたりから誰かにつけられてるとは気づいていたが、この静かな夜道。その気配が不気味に気になる。

「ねえ…なんか用なの？」

会ったことも見たこともないであろうその人物に霧真は好奇心のつまった声で問いかける。

「…。」

向こうは無言である。

「…気づくに決まってるじゃない。俺、こつ見えても探偵だからね。」

「…。」

「あらら。無言か。じゃあ、もひとつ。あなた、瀬戸さんでしょ？」

「…」ご名答。」

「はは。初めて喋ってくれた。で？どうしたんですか？」

「いや。ちゃんと仕事してるのか気になってね。」

「ふ。失礼だなあー。瀬戸さん。」

「失礼って霧真に言われるなんて思ってなかったな。」

「…え？聞こえない。」

「分かってるんでしょ。霧真さん、人のこと探ってばかりだと危ない目にあうよ。」

「例えば？あなたこそその手にある武器で俺が殺されるとか？」

「…。」

「冗談よしてよ。あー怖い怖い。最近は何騒だよ。大体、俺殺して困るのはあなただと思うよ。」

「…別に。僕は困りませんよ。」

「はは。んでも、殺すとなれば、俺はあんたの顔を拝めるわけで。俺、得してるよね。そしてあんたを不幸の底に落とそうとしてるからね。うわあ〜ねえねえ！これって一石二鳥なの？」

瀬戸からは何も聞こえない。

「ねえー。瀬戸さあーん。」

行っちゃったかな？

あーあ。残念。瀬戸さん見てみたかったのに。

そしてまた霧真は歩き出す。陽気にコンビニの袋を振り回して。

\*

東京 オフィス街駅前

駅前に着いたのは10時近く。その時間は人も減り、街の活気が小さくなる。

そんな中、一ノ瀬 紺は駅前の暗い小道に情報を求めてやってくる。

「なあ。あんたか？情報くれるってのは。」

「情報はくれてやるんじゃない。買ってもらうんだ。」

一ノ瀬の目の前に立っているのは、深く帽子をかぶる一人の男。どう見ても極道とかが似合いそうなやつである。

「わりいな。俺が知りたいのは、最近高い宝石が入ってきたかとか、ロンドン宝石事件についてなんだが…いくらだ？」

「…余裕だな。」

「あ？意味わかんねえけどまあいいや。今持ってるの3000え…」

タバコの煙たい匂いがつんと一ノ瀬の鼻をさす。  
刹那。

目の前に立っていた情報屋は懐から刃物を取り出しこちらにむかって切りかかる。ナイフはこの暗がり、鈍く光るだけで一ノ瀬はナイフだと気付くのに少々時間がかかった。

「おっと。」

ナイフだと気付くのに時間はかかったが持ち前の運動神経でなんとかわす。

「あつぶな。だめだろ。大の大人がこんなところで刃物振り回しちゃ。」

「は。依頼者からの伝言だ。」  
と男。

その発言を境に、まわりに男と同じような格好をした男達がぞろぞろ集まってくる。

「…おいおい…俺の話はスルーか。」

少し、多すぎないか？人数。なんだこれ。

なぜこんな状況に陥ったのか。一ノ瀬は分からなかった。さすがに一ノ瀬も苦笑いだ。

「まあ。なんだその。依頼者は気に入らない奴をとことん嫌う奴らしい。…感づいたあんたが悪いんだろうな。邪魔になったんだろ。あんたがさ。せっかくお前らエサに邪魔な組織2つとも…つってもその一つはお前らの組織だけだな。それひっくるめて外国に目がいってる隙にと…」

よくまあしゃべるなあ。

と一ノ瀬は思う。今のうち状況を整理しよう。

えーっと…

俺はなにをした？

こいつが依頼者依頼者いつてっけど、今回の宝石事件の依頼者は…あの店の店員だ。しかしあいつとは前も事件で関わったが大きな組織を動かせるような奴じゃなかった。…いつかの恨みを返そうと誰かが回したのか？どうだろう。…バズイスタ…ではないな。

一生懸命考える一ノ瀬だが、次の男の発言で試行錯誤したのが水の泡となる。

「…なあ。一ノ瀬 麻さんよお。」

…は？

え？麻？紺じゃなくて麻って言った？

「あの…あんたさ。人違いしてない？」

ここは正直に言つべきだろう！？  
と紺。

「はっ？とぼけんなって!!」  
とあざけ笑う男。

いやいや!! ホントだって!! あざけ笑いたいのこっちだあんぽん  
たん!!

と幼稚に紺。とはいっても口には出さないのだが。

「俺は、確かに一ノ瀬だけど。だけど!! 麻じゃなくて紺だから  
!! お兄さんの方だから!!」

うそつくな!!

などなど。まわりを囲む集団は口々にそう言う。

嘘じゃねえ!!

と一ノ瀬。もちろん口には出さない。

「だああああ!! 仕方ねえ!! 秘技!!」

意を決したように一ノ瀬。

「お。腹くくったか。」と男。

「おいおい。いいのかよ。おい! あっち見ろ!! 警察いるぞ!!」

大声を張り上げ一ノ瀬は男の真後ろを指差す。

…まさかと思つた君。

…残念ながらそのまさかなのである。

お願い！！引つかかれ！！あんぽんたん共！！  
必死に願う一ノ瀬。あんぽんたんはどつちだ。とつっこみたいところだ。

ばっ！

案の定…？男達は警察を警戒してか、一ノ瀬の指差したところを見る。

そして、男が一ノ瀬から目を離したその隙に。

一ノ瀬は壁のように立ちはだかつていた男達を蹴り飛ばし、無理やり逃げ道を作って逃げる。

「あ！！待て！！」

男達が口々にそう言う。

「待つかよ阿呆！！はははは！！あんな手に引つかかるなんてなあ！！」

数十メートル離れた先から一ノ瀬は男達にそう言う。

そのまま一ノ瀬は彼らにしばらく追いかけることになった。

\*

ロンドン フェリチターレロンドン支部

今日のロンドンはずらしく晴れていた。

「いいか！貴様ら！！今日で決着をつける！！」  
この古びたいぐあいレトロ口を醸し出している建物の会議室で声をあげているのは、この支部長であるジェネビィ・クウインシィだった。

「待つて下さい支部長！！この案には少し穴があるんすよ。」

そう、ジェネビィの横から声を上げるのはこの職員兼ヨーロッパ総合情報管理局局長のバジル・スタンフォードだった。

「ほら。ここで待ちかまえるのはどうかと思うんすよ。意外とこのルートは難しいと思います。以前うちのやつもそれで失敗しました。」  
とバジル。

「じゃあじゃあ、もう強行突破じゃない？ぶつちやけそれが一番の近道だし、目的の達成度だって他の案より高いし。」

ひょこつと出てきたのは会議室のホワイトボードに落書きをしている本部の特別業務員のデューイ・シャムロックである。

「しかし、強行突破じゃ後々面倒くさくなる。…そうしたいのはやまやまだが。すまんデューイ。却下だ。」  
と惜しいと言わんばかりの顔のジェネビィ。

「へへ。気にしないで。また考えるよ」  
と明るくデューイ。

「くそっ…難しいぞ。今回は…アランはなんかないのか？意見。」  
くるつとアランの方を向くジェネビィ。

「…あるわけないでしょ。…っていうか会議室はそういう話の為に使う場じゃありません！！」  
荒々しく怒鳴るアラン。

「なんだと！？ぬし…なめたらあぶないぞ！街角のケーキ屋を！！」  
真面目にジェネビィ。

「なめたくもなりませんよ！！そんなの！！っていうか、会議ついでから来たのに全然会議じゃないじゃないですか！？バズイスタ対策じゃないんですか！？この会議！！」  
バンバンバンと会議室の机を叩くアラン。

「街角のケーキ屋のケーキは貴様らパンピーには分かんほど並んで買っただぞ！しかも並んで買えない時がほとんどだ！！今日はセール日だし、限定ザックくんケーキが売ってるんだ！！今日の任務だぞ！？全員分限定ザックくんケーキを買うこと！！」

「そんな任務お断りだ！！」

「お前、ザックくんなめんなよ！！ザックくん強えーんだぞ！！片手でトラック止めてそのままトラック蹴り飛ばすんだぞ！！」  
とバジル。

「なに！？なんなの！？ザックくん？どんな設定だよそれ！！」  
とアラン。

「ザックくんは6歳のかわいい男の子。顔はペコちゃん似で、ある日自分の力に目覚めるんだ。それからザックくんは街の消火栓引っこ抜いたり、電柱真つ二つにしたりと大暴れしながらも、パン屋のトミーと今日もロンドンを駆け巡る！！って Wikipedia に。」  
とデューイ。

「どこまでも迷惑だろ！！ザックくん！！」  
とアラン。

とまあ…

こんな感じでバズイスタを追いかけているロンドン支部員達だが。

あの、ザックくん会議がやっと収束を迎え、真面目に仕事を始める  
ロンドン支部。

アランとデューイは支部内の休憩所で暇つぶしを始めた。

ガコンツッ！

自販機から飲み物が落ちる鈍い音がした。

「疲れた。真面目に働く気あるのか？ ロンドン支部。」  
先ほど自販機から買った缶コーヒーを取り出すアラン。

「ローマ支部に比べたら真面目だよね。」

と、アイスクリームの自販機を見つめながらデューイ。

変わり者たちのquintetto - 前章 - (後書き)

微妙なところで終わりました……

まだ描き途中ですスイマセン……

最近はブログに乗せてる小説にも書くのハマっています。

しろくろも、久しぶりギャグって感じで今回たのしくかけました！  
やっぱり、荒川見ていたらギャグとか書きたくなりますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6977k/>

---

しろくろっ！

2010年10月9日07時34分発行